
仮面ライダーディケイド～バカとテストと召喚獣の世界～（ W、オーズ、フォーゼも登場！）

ネガ・ナハト

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー・ディケイド／バカとテストと召喚獣の世界～（W、オーズ、フォーゼも登場！）

【Zコード】

N2073X

【作者名】

ネガ・ナハト

【あらすじ】

門矢士一行が次に来た世界はなんと、バカとテストと召喚獣の世界！？リイマジとWとオーズ、さらにはフォーゼも登場で笑いあり、涙ありの展開になること間違いなし！？

あらすじ

世界の破壊者・ディケイド。いくつもの世界を旅した彼らが次に来た場所。写真館の絵には、人間をデフォルメ化したようなのが様々な格好や武器を装備して戦っているものだつた。

「また、仮面ライダーのいない世界なんでしょうか？」

「だが、こういうのは悪くない。しかも、なんだか面白そうな気がしてきたぜ。」

「どこからそんな自信がでてくるんだよ」

「全くだよ。士には呆れたよ」

この四人は様々な世界を旅してきた、門矢士、光夏海、小野寺ユウスケ、海東大樹。彼らは仮面ライダーとして様々な世界で様々な敵と戦ってきた。四人は外に出ると服装が変わり学生服を身に付けていた。

「つて、あれ？いつもは士だけなのに」「本当ですね。私たちも変わっていますね」

「どうなつてるんだい？」

「ほ～お、みんな学生服か。」

出てきたのは、光夏海の祖父、光榮司郎。

「まあ、とりあえず行ってみるか。……文月学園に。」

あいすじ（後書き）

次回、

第1話「運命の振り分け試験」

第1話 運命の振り分け試験

士たち四人は、文月学園に着き正門の前にあつた看板を見て、急いで教室に向かつた。看板に書いてあつた内容は、

「文月学園振り分け試験日」と、書かれていたため、正門の前にいた筋肉質の先生に自分たちの教室を指示されたため、急いで行く。ユウスケは、教室に着くと、見覚えのある人物を見つけたが、はつきり言つて時間がないため、すぐに席に着き、筆記用具を出した。チャイムが鳴り、プリントが後ろから配られていく。

「（難しいなあ……そもそも俺つて、勉強そんな得意じやないしなあ）」

振り分け試験が終わり、ユウスケは見覚えのある人物たちの所に行くとやはり、過去に旅をしたときについた、辰巳シンジ、尾上タクミ、剣立カズマ、アスマ、ワタルたちだった。士たちの話によると、Wの二人と鳴海亜樹子もいたとのことだった。

「だが、見たことのないやつもいたな……。火野英司、アンク、如月弦太朗、歌星賢吾だつたか……？」

「僕のところには、照井竜、後藤慎太郎だつたかな……？」

「私がいた教室には、泉比奈、城島ユウキという方がいました。」

「そういえば、ショウウイチさんとソウジさんがいなかつたな……」

「明日はクラス分けだろう？明日の支度をして、もう寝たらどうだい？」

「そうですね、そうしましよう」

ちなみに彼らは会つていなかつたが、野上幸太郎もいるはずだつたのだが、この世界に来た瞬間テディとはぐれるは、文月学園の場所が分からなくて振り分け試験に間に合わなかつたなど、散々であった。

翌日、振り分け試験クラス分け発表

Aクラス

門矢士

海東大樹

尾上タクミ

フィリップ

照井竜

後藤慎太郎

歌星賢吾

城島ユウキ

Dクラス

光夏海

鳴海亜樹子

泉比奈

Fクラス

小野寺ユウスケ

辰巳シンジ

剣立力ズマ

アスマ

ワタル

左翔太郎

火野英司

如月弦太朗

野上幸太郎
という結果になつた。これから先、彼等彼女等を待つ学園生活はどうなるのだろうか……。

第1話 運命の振り分け試験（後書き）

次回、

第2話「入学！文月学園！」

リイマジ、W、オーズ、フォーゼ、幸太郎がバカテスの世界に来た
経緯はいつか書きます。

第2話 入学！文月学園！

「ユウスケ sides」

今日は文月学園の入学の日か……。土と海東は、「Aクラスは文月学園のエリートだからな、早めに行かないとな」と、ムカつく言葉を残して、さっさと文月学園に行ってしまった。因みに写真館から文月学園は20分位で着く。まだ7時半だったのに、早すぎだろ……。夏海ちゃんは昨日振り分け試験で知り合った、亜樹子ちゃんと比奈ちゃんと一緒にに行くそうだ。俺はシンジ達と合流して一緒に行くつもりだ。因みにシンジ達は写真館の隣りにあるアパート「学陽荘」に住むことにしたらしい。部屋の振り分けは一階一号室にはシンジとカズマとタクミ、二号室にはワタルとアスマ、三号室には幸太郎、四号室にはショウイチさんとソウジさん。なんとこの二人は先生なんだそうだ。（ショウイチさんが古典でソウジさんが日本史だそうだ）一階五号室には如月弦太朗くん、歌星賢吾くん、城島ユウキちゃんという感じだ。Wの四人はそのまま探偵事務所で、オーナーの五人はクスクシ工というコスプレ喫茶店で住むことにしたらしい。五人というのは、英司さん、アンク、比奈ちゃん、後藤さんと後一人伊達明という保険体育の先生のことだ。とりあえずシンジ達と一緒に

文月学園を目指した。一緒に歩いているときみんなに事情聴取をしたらいつも通りの生活を送っていたら例のオーロラに飲み込まれてしまつたんだそうだ。話してるとき思ったことは初めて見る映司さんとアンクと後藤さんと弦太朗くんと賢吾くんとユウキちゃんは思つた程かなりいい人だった。話をしているといつの間にか文月学園に到着していた。

「じゃあ、私と賢吾くんは2-Aだから、頑張ってね弦ちゃん」

「おう！ ユウキと賢吾も頑張れよ！」

「ぐれぐれもその場違いの学ランをバカにされないようにな……」

確かに弦太朗くんの服装は俺達と違つて不良のような着方をしていた。生活指導の先生に絶対注意されたな……。

「火野、アンクお前達も頑張れよ」

「はい、後藤さんも頑張ってください」英司さんも後藤さんを見送った。

「じゃ、俺は職員室に行きますか」

「では、俺達も」

「行くとするか」伊達さんとソウジさんとショウイチさんは職員室に向かつた。その後Aクラスにはフィリップと照井さんが行つた。

「じゃあ私たちはDクラスだから」

「コウスケも皆さんも頑張つてくださいね」

「映司くんもアンクも頑張つてくださいね」

「うん、比奈ちゃんもね。ホラ、アンクも」

「……」

アンクは決して悪い奴じやないけど、妙に無愛想だ。

「ところでよお、Aクラスの教室見たか?」

「ああ、あれは凄かつたな」

「デスクトップに個人エアコンに冷蔵庫に黒板はスクリーンボードと来たからなあ」

「あの設備で勉強できるタクミ達が羨ましいよ」

「え? 僕達もあの設備で勉強できるんじゃないんですか?」

「分かりませんよワタル。さつきから教室を見てみると設備がどんどん貧乏になつていいような気がするんです。」

「ま、まさか俺達のFクラスはとつもなく貧乏だつたりして……」

「ああ、床は畳でカビが生えていて机はボロい卓袱台で、椅子は綿があまりない座布団でどぎめは隙間風が酷い壁かも知れないな……」

「……」「……」「……」「……」

沈黙する俺達。

「い、いやそんなことはないだろ?」

必死に反論する弦太朗くん。アンクの言つていることが合つていて

そうで何か怖い。意を決してFクラスの教室を目指す俺達。そして、
教室の前に着いた俺達は、再び沈黙する。

「」「」「」「」

大丈夫か……俺達の学園生活……。

第2話 入学！文月学園！（後書き）

次回、「自己紹介は、人生の左右」

映司「俺の名前間違いすぎじゃない……？」

作者「ホントにスマン」

カズマ「学陽荘の名前のモデルは、文学と月の反対の太陽からどうだよ」

第3話 自己紹介は、人生の左右

自分たちの教室の前で沈黙するユウスケたち。それもそのはず、先ほどAクラスの教室を見たユウスケたちは自分たちFクラスの教室が、あからさまにボロいのだ。まだ中は見てないが、見た目だけでのボロさ……。一体中はどうなっているのか。

映司「こういう感じの教室つて、絶対不良とかいそうだよね。」

弦太朗「何言つてんだ。こんなのに見た目だけだ！ 中に入れば、きっと心優しい奴が待つていてるに違いないぜ！」

ワタル「あなたほどプラス思考で緊張しない人初めて見ましたよ」

弦太朗「こんな所でウダウダしてもしうがねえ！ 僕から入るぜ！（ガラツ）すまねえな、ちょっと遅れちまつたぜ！」

？？？「早くすわれ！ 明久以下のウジ虫野郎！」

弦太朗「何だと！ 僕達はウジ虫なんかじやねえぞ！」

アスム「たちつて、僕らも含まれているんですか！？」

？？？「やめなよ、雄二！ 人をウジ虫呼ばわりするのは」

雄二「… それもそうだな、ウジ虫は明久で充分か」

明久「それもダメだよ！」

弦太朗「… オイ、お前、コイツに謝れよ」

雄二「何だお前は。なぜ俺がコイツに謝らなきやならない」

弦太朗「そんなの簡単だ！ コイツはウジ虫なんかじやねえ… 365

度どこから見ても美少年で目が生き生きしている男の中の男だ！」

映司「弦太朗くん、5度多いよ」

弦太朗「うそ！？ マジで！？」

雄二「ハハハ、コイツは驚きだ。明久並みの馬鹿がこんな所にいるとはな。世界は広いもんだぜ」

弦太朗「何だと！ テメエ！…」

福原「えーと、ちょっと通してもうれますかね？」

弦太朗「え？ お、おうすまねえな」

福原「おや…随分と派手な服装ですね。文月学園の制服は貰っていないのですか？」

弦太朗「いや、俺はこの服装が気に入つてんだ。別にいいだろ？」

福原「それでは困るんですがねえ…まあ、仕方がありません今回だけ良しとしましょう」

弦太朗「マジで…? やつたぜ！」

福原「今回だけですよ。あなた達も早く席に着いてください」

「…あ、はい…」

福原「えー、おはよづけざいます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願ひします」

福原は薄汚れた黒板に名前を書こうとしたが、やめた。チョークすらろくに用意されていないのだ。

福原「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されますか？不備があれば申し出て下さい。」

翔太郎「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入つてないですー」

福原「あー、はい。我慢してください」

カズマ「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

福原「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

ユウスケ「先生、窓が割れていて風が寒いんですけど」

福原「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しましょう。必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

…

映司「アンクが言つたこと、全部正解じゃないかーー！」

アンク「うるさいぞ映司」

福原「…では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願ひします」

秀吉「木下秀吉じや。演劇部に所属してある。」

カズマ「へえー、随分と可愛い子だなあ。でも、何で男子の制服着

てるんだろ？」

秀吉「お主、それはワシが男に決まつてゐからじゃな」

カズマ「ええ…? 「つそ！？ 可愛いって言つて」」めん！」

秀吉「いや、そこまで必死に謝らんでも…まあ、今年も一年よろしく頼むぞい」

康太「……土屋康太」

シンジ「土屋くんつて、カメラに興味があるの？」

康太「……何故そんなことを聞く」

シンジ「え？ だつてそのポケットから出でるの、デジカメじゃないの？」

康太「……忘れる」

シンジ「??？」

美波「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

映司「海外かあ。どこの国なの？」

美波「趣味は吉井明久を殴ることです」

映司「スルー！？俺の質問スルーした上に、趣味が恐ろしいよ！後、なんか震えてる子いるけど、君が吉井くんなんだね！？」

ユウスケ「じゃあ、俺か：小野寺ユウスケです！みんなの笑顔が大好きです！よろしくお願ひします！」

「…………」

ユウスケ「え、ちょ、なに！？ その変態を見るような目は…」

シンジ「辰巳シンジです。趣味は写真撮影です。よろしくおねが…」

康太「……（ぐつ）同志」

シンジ「え？ 握手はありがたいけど、何の？」

カズマ「剣立カズマです。あの……その可愛い女の子を見るような目はなんですか……？」

「…………」

アスマ「アスマです。趣味は、和太鼓と歌舞伎です。よろしくお願

いします」

秀吉「おお、お主歌舞伎ができるのかー…？」

アスマ「ええ、まあ……」

秀吉「（ぐつ）是非今度演劇部でひらりしてくれ！」

アスマ「あ…はい／＼／＼

野上幸太郎「野上幸太郎。……やつと喋れたよ全く」

ワタル「ワタルです。趣味はヴァイオリンを弾くことです」

翔太郎「左翔太郎だ。……一年間よろしく頼むぜ。……（ふつ、きまつたな。……その割にはナルシストを見るような目で見られてるのは

なんでだ……？）」

映司「火野映司です。明日のパンツとちよつとのこぜ……」

「あ、明日のパンツだつて！？」

「な、何てパンツへの執着心が高いんだ！」

「尊敬するぜ！火野映司！」

映司「??まあ、とりあえずよろしくお願ひします」

アンク「（あのバカが……）アンクだ……」

弦太朗「如月弦太朗だ！俺の夢はこの学園のみんなと友達になることだ！…よろしく！」

明久「（さて、そろそろ僕か……）吉井明久です。気軽にダーリンつてよんでもくださいね」

『ダアアーリイーーン！…』

弦太朗「おう…よろしくな、明久」

明久「失礼。忘れてください。とにかくお願ひします。」

瑞希「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えつ…』

福原「ちょうどよかつたです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

瑞希「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします……」

「はーつー質問です！」

瑞希「あ、は、はいつ。なんですか？」

「なんでここにいるんですか？」

弦太郎「てめえ…！あいつがここにいちや悪いのか！」

「い、いやそういう訳じゃ…」

瑞希「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…」

幸太郎「うらやましい…俺なんて文月学園がどこにあるか分からなかつたのより、マジだ…」

映司「…何があつたの幸太郎くん？」

自己紹介を一通りすませた後、瑞希のところに明久と雄二が駆け寄り、話をしていたが、福原先生が教卓を叩いて警告したが、その瞬間教卓がゴミ屑と化す。先生が替えを用意してくる間に明久と雄二は廊下に出て、話をしたあと、福原先生が教卓の替えを持ってかえってきた。

福原「坂本くん、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

雄二「了解」

福原「坂本くんはFクラスのクラス代表でしたよね？」

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなようによんでもくれ。さて、みんなに一つ聞きたい。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが不満はないか？」

『大ありじやあつ！！』

雄二「だろう？俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている

映司「そうだ！そうだ！」

翔太郎「いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだろ！」

幸太郎「そもそもAクラスだつておんなじ学費だろ？この差は大き

すぎるって！」

雄二「みんなの意見ももつともだ。そこで、これは代表としての提案だが、FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた……。

第3話 自己紹介は、人生の左右（後書き）

次回、第4話「キーワードは「変身！」ではなく、「試験召喚！（サモンつ！）」に、スイッチ・オン！

第4話 キーワードは「変身」ではなく、「試獣召喚つー（サモンつー）」

Aクラスへの宣戦布告。それはこのFクラスにとつては現実味のない提案にしか思えなかつた。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何も…グフオア！』

幸太郎「モブの癖にラブコールすんな、気持ち悪い」

雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろ？』

『何の根拠があつてそんなことを』

雄二「根拠ならあるや。」のクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃つてこる。それを今から説明してやる

雄二「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

康太「……！」（ブンブン）

瑞希「は、はわっ」

雄二「土屋康太。コイツがあの有名な“ムツツリー”だ

康太「……！（ブンブン）」

『ムツツリーだと……？』

『馬鹿な、ヤツがそうだといふのか……？』

『だが見る。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そつとしているぞ……』

『ああ。ムツツリーの名に恥じない姿だ』

カズマ「つまり、往生際の悪いただのムツツリスケベじゃ……」

雄二「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だつてその力はよく知つてゐるはずだ」

瑞希「えつ？ わ、私ですか？」

雄二「ああ。ウチの主戦力だ。」

『 そうだ。俺達には姫路さんがいるんだつた』

『 彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『 ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

ワタル「モテないモブの癖によくそんなラブコール送りますね。僕はあなたと違つてモブじやないからそんな真似できませんよ」

「 「 「 ワタル君ナイスフォロー！」」

雄二「木下秀吉だつている」

『 おお……！』

『 ああ。アイツ確か、木下優子の……』

雄二「当然俺も全力を尽くす」

『 確かになんとかやつてくれそつな奴だ』

『 坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかつたかな？』

『 それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だつたのか』

『 実力はAクラスレベルが一人もいるつてことだよな！』

雄二「それに、吉井明久だつている」

……シン

明久「ちよつと雄二ーーどうしてそこで僕の名前を呼ぶのさー全くそんな必要はないよね！ ホラ、折角上がりかけてた士氣に翳りが見えてるし！ 僕は雄二たちとは違つて普通の人間なんだから、普通の扱いをつて、なんで僕を睨むの？ 士氣が下がつたのは僕のせいじゃないでしょう！」

弦太朗「そのとおりだ！ 士氣が下がつたのは明久のせいじゃねえ！ てめえらモブの癖して、偉そうに明久を睨むんじやねえ！ 代表の説明を聞いてからにしろー！」

明久「（何だらう。僕今日凄く弦太朗くんに助けられている気がする……）」

雄二「そうだな。如月の言うとおりだ。だったら教えてやる。コイツの肩書きは『観察処分者』だ」

弦太朗「……明久」

明久「な、なに弦太朗くん……？」

弦太朗「観察処分者ってなんだ？」

明久「え…と、その…」

雄二「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういうた類の雑用を、特例としてものに触れるようになつた召喚獣でこなすといった具合だ」

瑞希「そなんですか？それって凄いですね。召喚獣って見た目と違つて力持ちつて聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

明久「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

弦太朗「つまりソイツは、他の奴らと違つて召喚獣の扱いが上手いってことだな！」

『おいおい。『観察処分者』ってことは、試合戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいつてことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるつてことになるよな』

雄二「気にするな。どうせ、いてもいなくとも同じような雑魚だ」

明久「雄二、そこは……」

弦太朗「てめえ！いい加減にしろ！」

雄二「なんだ如月。俺に文句があるのか」

弦太朗「大アリだ！てめえは明久を勝てる要素として見てるのか雑魚なのかはつきりしやがれ！」

雄二「俺は、一つの科目で勝負できないと雑魚だと言つてるんだ。」

弦太朗「なにい…！」

雄二「無論…それは、お前たち転入生にも言えたことだ」

ユウスケ「ちょっとと待って、それって逆に言えば一つの科目で勝負できれば俺達はモブより使えるってことだよな？」

雄二「その通りだ。とりあえず転入生も立つてくれないか？実を言

うとお前たちもこのクラスにとって重要な戦力なんだ」

「「「ええっ！」」

雄二「じゃあ、説明するぞ。みんなも聞いてくれ。」

雄二「まず、小野寺ユウスケ。コイツは古典ならば500点取つているんだ。」

『なにいい！』

『「こ、500点だつて！？』

雄二「次に辰巳シンジ。コイツは現代社会で400点後半は取つているんだ。」

『マジかよ！』

雄二「剣立力ズマは、数学ならAクラス上位と互角だし、それ以下ならばはつきり言って敵じやない。」

『Aクラス上位以下が敵じやないって……！』

雄二「アスマの得意科目の日本史は400オーバーを誇るし、おまけに腕輪の能力の鳴刀・音叉剣はAクラスの召喚獣の盾を破壊する威力を持っている」

『す、すげえ！盾を破壊しちまうのかよ！』

雄二「野上幸太郎は元々Aクラス並みの点数を持つている。もし振り分けでAクラスにまわっていたら強敵だった」

『おお！つてことは野上も姫路さんとおんなじ病欠だったのか！』

幸太郎「いや。学園の場所が分からなくて振り分け試験に間に合わなかつただけなんだけど……」

『……なんか、スマン』

雄二「ワタルはアスマの得意科目を世界史にしただけだが……」

ワタル「アスマの世界史ヴァージョンなんてどこが凄いんですか」

雄二「腕輪の能力が凄いんだ。相手クラスが優勢なフィールドだけ

をブレイクすることができるんだ」

ワタル「なんですかそれ！？チートじゃないですか！」

雄二「左翔太郎は英語ならAクラスのモブどもを一瞬にして蹴散らせる。」

翔太郎「はん、さすがは俺だな」

雄二「火野映司は、英語と世界史の二つがAクラス並みだ。生物はダメだがな」

『凄い！他と違つて二科目もあるのか！』

ワタル「でもなんで生物がダメなんですか？」

映司「だって、蛇怖いし……」

ワタル「蛇以外にも学ぶものがありますよね！？」

雄二「アンクは生物が得意だが、他の科目は殆どBクラス並みだし、苦手科目がない」

映司「え？じゃあなんでアンクはFクラスに？」

ユウスケ「病欠だつたんじゃないかな？」

幸太郎「学園の場所分からなかつたとか？」

カズマ「それ、あんただけ」

アンク「……」

雄二「最後に…如月弦太朗。コイツは殆どの科目が駄目駄目だが…」

『それじゃあ、吉井並みにつかえないじゃない…』

弦太朗「…俺は友達作りのためにも人を殺したくはねえんだけど…？」

『「ごめんなさい！許してください！」』

雄二「最後まで話しを聞け。…コイツの得意科目は物理なんだが…

その点数は担当の先生を超える程だ！」

『な、なにいい！』

『ちょっと待て、あいつホントに不良なのか！？』

弦太朗「そんな驚かれてもよ…俺は単に物理が得意なだけで…」

雄二「その得意はAクラスを超える程まで得意になつちまつたらし

いぜ……如月？」

弦太朗「雄一。本当の明久の実力をおしえてもらおうか…」

雄一「ああ、いいだろう…みんな、さつきは明久を『観察処分者』と言つたが、それだけじゃない。明久は、日本史と世界史の一科目が姫路と互角なんだ」

『な、何だと！』

『姫路さんと互角だと…』

瑞希「凄いですね、吉井くん。本当なんですか？」

明久「う、うん。でも姫路さんと同じ位までは、知らなかつたよ…」

雄一「とにかく、今挙げたメンバーを中心にはすれば、絶対に勝てる！全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーーっ！！』

雄一「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステム、スクだ！」

『うおおーーっ！！』

その後、明久と弦太朗がFクラスの使者として、Dクラスに宣戦布告しに行つた。下位クラスの使者は酷い目に遭うといつづを聞いた弦太朗が一緒に行くといつたのだ。

その時、雄一は気に食わない顔をしていたのは秘密だ…。明久と弦太朗が戻つてくると、二人共無傷だった。明久の話によると、確かに襲いかかつてきただが、弦太朗が連中をシバいたため、無傷で済んだそうだ。その後、Fクラスの主力メンバーで屋上でミーティングをすることにした。

（屋上）

雄一「明久、如月。宣戦布告はしてきたな？」

弦太朗「おう、ばっちりだ」

明久「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど

美波「それじゃ、先にお昼ご飯つてことね？」

雄二「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物食べようよ？」

明久「そう思うならパンでも奢ってくれると嬉しいんだけど」

映司「えつ？ 吉井くんつてお昼ご飯食べない派？」

明久「いや。一応食べてるよ」

雄二「……あれば食べているといえるのか？」

明久「何が言いたいのさ」

雄二「いや、お前の主食つて 水と塩だらう？」

「」「」「」「」「」「」

明久「きちんと砂糖だつて食べているさー。」

カズマ「それ食べるとは言わないよね…」

アスマ「“舐める”が、正解ですよね」

シンジ「…もしかして、吉井くんつて一人暮らし？」

幸太郎「そうだとしても、どんな生活送ればそうなるんだよ…」

ユウスケ「逆に親と一緒に住んでたら、立派な虐待だよな」

雄二「ま、飯代まで遊びに使うお前が悪いよな」

明久「し、仕送りが少ないんだよ！」

翔太郎「いや、お前の趣味のせいだろ…ハードボイルド小説とか、時代劇ものの

DVDとか…」

ワタル「それあなただけです」

瑞希「……あの、良かつたら私がお弁当作つてしま jóうか？」

明久「ゑ？」

アスマ「字間違えでますよ… 一応正解ですけど」

明久「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ！」

映司「…ねえ、吉井くんつていつからそんな食生活？」

明久「えつと… 一年の時からずっと？」

「…おかげ分けてあげようか？」

雄二「それで生きていけるお前の生命力とは大したもんだな…」

秀吉「良かつたのう明久。」

康太「……女子の手作り」

明久「うん！」

美波「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井に“だけ”に作つてくるなんて」

瑞希「あ、いえ！その、皆さんにも……」

弦太朗「俺達にも？いいのか、瑞希？」

瑞希「はい。嫌じゃなかつたら」

シンジ「でも、相当な人数だけど大丈夫？」

カズマ「もし何だったら俺達、自分の手作り弁当でいいけど……」

ユウスケ「えつ。俺ぶつちやけ瑞希ちゃんの……」

瑞希「遠慮なんてしないでください。ちゃんと皆さんの分を作つてあげますから」

アンク「ここまで来たら断る理由はないな……」

映司「そうだね」

美波「……お手並み拝見ね」

明久「姫路さんって優しいね」

瑞希「そ、そんな……」

明久「今だから言つけど、僕、姫路さんのことが好き」

幸太郎「明久。今振られると弁当の話しなくなるよ」

明久「にしたいと思つてました」

雄二「さて、話しがかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」秀吉「雄二。一つ気になつたんじやが、どうしてロクラスなんじや？」

ワタル「そういえば、そうですね。どうしてですか？」

雄二「色々と理由はあるんだが、主力メンバーがこれだけいればEクラスとはやりあうまでもない相手だからな」

明久「それも、そうか」

アンク「待て……それならロクラスとは正面からぶつかると厳しいのか？」

映司「そうだよね…。自己紹介の時、あれだけのことがあれば、Dクラスも攻め落とす必要ないと思うんだけど…」

明久「だつたら、最初からAクラスに挑もうよ」

幸太郎「分かつた…Dクラスを倒して、今後の景気づけにするつもりでしょ？」

雄二「流石だ。その通りだ。」

美波「でも、Dクラスに勝てなかつたら意味がないわよ」

雄二「負けるワケないさ。いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

弦太朗「へつ、なんだか面白くなつてきたぜ…」

幸太郎「Aクラスの連中をギャフンと言わせてやるか」

雄二「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

午後、Fクラス対Dクラスの試合戦争が開戦された。生徒たちは召喚獣を駆使して戦っている光景が広がっている……

弦太朗「どうすりやいいんだ――――！」

如月弦太朗は召喚獣の出しが分からず折角捕まえた物理の先生と対戦相手の生徒は苛立つていた

「早く召喚獣の召喚を行ってください」

弦太朗「だからどうやつてやればいいんだよ…」

「君の好きなポーズを取つて、大きな声で「サモン！」と叫べばいいんだ」

弦太朗「よし！分かつたぜ！えーと、ポーズは……」

「あのさあ、早くしてくんない？」

「そうそ。大体最下位のFクラスと戦うなんて時間の無駄だな」

弦太朗「なんだと…！」

「そもそも最下位のクラスがDクラスは愚かEクラスにも勝てないんじゃないのか？」

ギャハハハハハと、笑うDクラスの二人。だが、馬鹿にされたことにより弦太朗はプツンとキレる。

弦太朗「ふざけんなよ……！ ちょっと勉強ができないぐらいでなんでもここまで言えるんだよ……！」

「ちょっとじやなくて、“かなり”だろ？」

ギャハハハハハと、再び笑い出す。

弦太朗「もう許さねえ……！ 物理で勝負されたことを後悔させてやるよ……！」

「ああ？ それはこっちのセリフ……」

弦太朗「試験召喚獣召喚、サモン！」

弦太朗は仮面ライダーフォーゼへの変身ポーズを取り右手を開いて高くあげる。すると、魔法陣から弦太朗の召喚獣“デフォルメの仮面ライダーフォーゼ”が現れて、頭の上に点数が表示された。

Fクラス	如月弦太朗	VS	Dクラス	中村友樹	&	金沢啓太
物理	722点	VS	78点	&	82点	

「な、なんだあの点数は！」

「バカな、あいつ本当にFクラスの不良か！？」

弦太朗「ロケット・オン！『ロケット・オン』くらえええ！」

デフォルメフォーゼのロケット突撃パンチが一体の召喚獣を補習室送りにした。

Fクラス	如月弦太朗	VS	Dクラス	中村友樹	&	金沢啓太
物理	712点	VS	0点	&	0点	

「「バカなああ！！！」

西村「戦死者は補習…………！」

弦太朗「いよっしゃ―――やつたぜ！さ、Dクラス代表の首を貰いにいくか！」

その後弦太朗は、数学勝負を仕掛けられ、補習室送りにされた……

⋮
o

第4話 キーワードは「変身！」ではなく、「試獣召喚つー（サモンつー）」

明久「次回、「第5話乗り越えろ！女の恐怖！」に、「バカテスオールキャラ『『『スイッチ・オン！』』』

第5話 乗り越えろー・女の恐怖！（前書き）

バカテスト 物理

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい
如月弦太朗の答え

『粒子』

教師のコメント

正解ですけど、君は本当に不良ですか？

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

左翔太郎の答え

『波は闇であり、二つが混じりいはずれはどうやらかが勝つの』

教師のコメント

吉井くんと一緒にRPGのゲームができてしましましたが、いつか先生にプレイさせてください。

第5話 乗り越えろ！女の恐怖！

弦太朗が補習室送りにされた時、小野寺コウスケ、左翔太郎、火野映司はDクラスの光夏海、鳴海亜樹子、泉比奈と鉢合わせした。「映司くんたちには悪いけど、代表の平賀くんはやらせない！」「コウスケ、覚悟してください！」

「翔太郎くんも、補習室送りにしてやるんだから！」
「サモン！」

Dクラスの三人は召喚獣を召喚する。

「こうなつたら、やるつきやない！」

「ああ、逃げるだなんてカツコ悪い真似はできねえしな」
「やるしかないか…！」

「サモン！」

コウスケ、翔太郎、映司の三人も召喚する。

Fクラス 小野寺コウスケ v s Dクラス 光夏海

日本史 35点 v s 83点

Fクラス 左翔太郎 v s Dクラス 鳴海亜樹子

日本史 42点 v s 75点

Fクラス 火野映司 v s Dクラス 泉比奈

日本史 81点 v s 127点

「なにこの、ドングリの背比べ…」

「一緒にしないでよね！アタシ達Dクラスなんだから！」

「そこまで胸はって自慢することじゃありませんよ…」

「翔太郎さん！時代劇ものに興味あるならもうちょっと頑張つてくださいよ！」

「コウスケこそ、その点数はねえだろ！」

「なんでもいいからはじめない…？」

「くつ！点数が低いと全然当たらない…こうなつたら！」

コウスケは狙い撃ちから乱れ撃ちに換えた。そのおかげで、壁や窓

ガラスに穴が空いた。因みに、弾丸は一発も命中しなかった。

「どこを狙つてるんですか、ユウスケ！？」

「あ、あれ？一発ぐらい当たるかと…（グサツ）ギャアアア！」

キバーラのサーベルを頭に突き刺されたユウスケ。

Fクラス 小野寺ユウスケ vs Dクラス 光夏海

日本史 0点 vs 83点

「小野寺、補習だー！」

「いやだあああ！」

一方こちらでは、翔太郎と亜樹子が戦っていた

「ユウスケくんは補習室送りみたいだよ？いい加減あきらめたらどう？翔太郎くん」

「くそっ！なんだよお前の武器ただのでつかいスリッパかと思ったら、盾としても優秀じゃねえか…！」

「（ピクッ）今なんてゅうたん…？」

「ああ？ただのでつかいスリッパって…」

「ただのでつかいスリッパやとおお！？」

「ま、また亜樹子、悪かつた、悪かつたてえええ！」

ジョーカーは巨大スリッパの餌食となつた。

Fクラス 左翔太郎 vs Dクラス 鳴海亜樹子

日本史 0点 vs 72点

「まざいな…一人共補習室送りにされたか…！」

「もう映司くん一人だけだよ。…最も簡単に引いてくれないと思うけど」

「くつ……」うなつたら…コンボチェンジ・サゴーゾー！

「サイ！ゴリラ！ゾウ！サツゴーゾ、サツゴーゾ！」

Fクラス 火野映司 vs Dクラス 泉比奈

日本史 71点 vs 127点

「やっぱり…防御重視のサゴーゾにチェンジしたね…でも…」

「比奈さん、加勢します！」

「アタシも協力するわ！」

Fクラス 火野映司 vs Dクラス

泉比奈 & 光夏海 &

鳴海亜樹子

日本史 71点 vs 127点 & 83点 & 72点

「加勢して点数を上げたとしても、防いで一気に反撃にでてやるー。」

「いくよみんな！」

「「「ハアアアアア！」」

「ウオオオオ！」

Fクラス 火野映司 vs Dクラス 泉比奈 & 光夏海 &
鳴海亜樹子

日本史 0点 vs 127点 & 83点 & 72点

「勝てるわけないじゃん……」by 映司

古典

Fクラス 姫路瑞希

339点

vs

Dクラス 平賀源二

129点

「え？ あ、あれ？」

「「「」めんなさい」」

Dクラス代表 平賀源二 討ち死に

『うおおーーっ！』

その報せを聞いたFクラスの勝ち鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。喜ぶ明久・美波・秀吉・康太とシンジ・カズマ・アスム・幸太郎・ワタルとモブ…のことはどうでもいい。

『『『ひでえ！』』

「ラブコール送るからそつこつことになる…」

幸太郎、ナイスフォロー。

しかし、喜べないメンバーと言えば、補習室送りにされた、弦太朗、ユウスケ、翔太郎、映司の四人だった。

「そう…良かつたね」

「そんなにヤバかったのか…？」

「アンクも体験してみればわかるよ…現に弦太朗くんを見てみなよ…」

そう言わると、弦太朗の方を向くと、頭に包帯まで頬に絆創膏が貼られていて松葉杖を使っている弦太朗がいた。

『『『いや、何があつたホントに――――！？』』』

FクラスとDクラスの思いが声と一緒になつた…。

『『『いや、何があつたホントに――――！？』』』

雄一の話によると、Dクラスとの設備交換は行わないことにした。その代わり、Dクラスは雄一の指示でBクラスの室外機を壊して欲しいという条件で、交渉は成立した。

「でもなんでまた…」

「次のBクラス戦の作戦に必要らしいよ」

疑問に思うカズマに聞いたシンジが答える。

「室外機を壊すことには意味がある」

「それも、そのうち分かるだろ…」

疑問に思うワタルに試合戦争で疲れた幸太郎がめんどくさそうに答える。

「そういえば、明日はテストですよね」

思い出したかのようにアスマがいづ。

「ああ、明日点をとつとかないと次は厳しいな……」

Aクラス並みの学力の幸太郎が言う。それもそのはず、次回はBクラス戦だ。シンジの情報によると、Bクラス代表根本恭一は、勝つためには手段を選ばない卑怯者だと言つのだ。尚更今回のDクラス戦よりも苦戦するのは、確実だ。とにかく、得意科目以外の点数を上げることが彼らの課題であり、それが明日のテストで決まるのだ……

翌日、午前中の四教科が終わり、昼ご飯にしようとして立ち上がる明久たち。しかし、今日は瑞希がお弁当を作つたというので、全員屋上へ行つた。

現在、目の前に広がる屋上の光景には、Fクラス代表坂本雄一が倒れていた。なぜこうなったかと言うと、原因是、瑞希の手料理だつた。瑞希は料理が下手。恐る恐る幸太郎が聞いた所とんでもない材料が含まれており、化学ができる生徒ならばすぐにでも、口に含んではいけないと分かつた。コウスケは上手く美波に説明して、料理を食べさせないようにした。メインディッシュだけでなく、デザートまで用意していた瑞希。スプーンを忘れたと言うので、彼女は今教室に戻つた。

「そういうえばユウスケ……確かに瑞希さんの料理が食べたいって……」

「ちょっとまつて！ まずいだなんて聞いてないよ！」

「幸太郎くん！ 君の不幸体質が裏をかいできつと生還できるはずー！」

「無理いうなよ……」

「こいつなつたら俺がいってやるぜー！」

「無事に帰つてきてください」

「こじはワシがいくかのつ……」

「頑張つて秀吉ー！」

結局、昨日余計なこと（死亡フラグ）を言つた（立てた）ユウスケと、不幸体质挽回のために食す幸太郎と、勇気ある不良如月弦太朗と、自称ジャガイモの芽をたべても頑丈な鉄の胃袋をもつ秀吉が、メインディッシュの残りとデザートを食べることになった…。

数分後、ユウスケ、弦太朗、秀吉の三人は保健室に運ばれたが……

幸太郎“だけ”病院に搬送された……

第5話 乗り越えろ！女の恐怖！（後書き）

明久「次回、「第6話見つけだせ！対Bクラス必勝法！」に、
士&海東」「スイッチ・オン！」」

幸太郎、安定の不幸体质。挽回は夢のまた夢で終わりそう。
幸太郎「○」「×」

第6話 見つけだせ！対Bクラス必勝法！

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん。相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

美波の疑問に雄一が答える

「なぜBクラスだ。俺たちの目標はAクラスのはずだ」

アンクが雄一に問う

「正直に言おう」

雄一が急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスにかてやしない」

戦う前から降伏宣言する雄一。

「それじゃあ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄一、さつきと言つてることが違うじゃないか」

「はつきり言うが、俺たちのクラスは、主力メンバー以外のモブは役に立たない」

「え？」

雄一の発言に驚愕する明久

「Dクラス戦の時に様子を見てみたが、モブどもは主力メンバーに頼りすぎていることが分かつたんだ」

「な、なんだよそれ！ それじゃあ、わざわざDクラス上位の三人と戦つて補習室送りにされた俺たちはどうなんだよ！」

「ぶっちゃけお前たち三人が補習室送りにされたとき、期待はずれのような面をしてたな……」

「ふざけんな————」「」

ユウスケの疑問に雄一が答えると補習室送りにされた四人は、当然

の如く怒つた。

「落ち着け。ちゃんとモブどもにも戦つよう説得はしてやるから」

「そつか？だつたらいいんだけどよ…」

「雄一の提案に納得する弦太朗

「で、結局どうすりわけ…？」

幸太郎が話を戻す

「Aクラスとは、一騎打ちでやるつもりだ

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う。設備入れ替えのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやつたら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」「うう

明久と瑞希の疑問に雄一が説明する。

「そうと決まれば、明久。テストが終わったらBクラスに行つて宣戦布告して來い」

「断る。雄一が行けばいいじゃないか」

「雄一の頼みを断る明久。

「それならジャンケンで決めないか」

「ジャンケン？…OK。乗つた」

「よし。負けた方が行く、でいいな？」

明久は雄一に頷いて返す。

「ただのジャンケンでもつもらないし、心理戦ありでいこう

「分かった。それなら、僕はグーを出すよ

「そつか。それなら俺はお前がグーを出さなかつたらブチ殺す」

「もしそうするなら俺はお前をブン殴る」

「弦太朗くん、すじが通つてないよ」

ジャンケンに加入した弦太朗にツツ「ミミを入れる映司。

「行くぞ、ジャンケン」

「わああつ！」

「ビビるな明久！チヨキを出せええ！」

雄二 パー

明久 チヨキ

「明久。ブチ殺す……！」

「させるかああ！」

「グフオア！……如月、てめえ……！」

「如月に雄二！喧嘩するでない！」

弦太朗と雄二が喧嘩を始めたが、秀吉が仲裁に入り、なんとか止める。

結局、明久と弦太朗が行き、Bクラスをシバいてきたため、やはり二人は無傷だ。

開戦は明日の午後。主力メンバーは家に帰つてテスト勉強をすることにした……

第6話 見つけだせ！対Bクラス必勝法！（後書き）

明久「次回、「第7話 打ち碎け！Bクラスの野望ー・前編」に、
タクミ「スイッチ・オン！」

第7話 打ち碎け！Bクラスの野望！前編

キーンゴーンカーンゴーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。Fクラス対Bクラスの試合戦争が始された。

雄二「よし、行つてこいー目指すはシステムデスクだ！」
『サー、イエッサー！』

カズマ「いた、Bクラスだ！」

シンジ「高橋先生をつれているのか…？」

弦太朗「向こうは総合科目で勝負するつもりか…！」

翔太郎「だったら、俺たちは一教科だけば抜けているのがあるからな…いくぜ！」

「…サモン！」「…」

総合

Fクラス 左翔太郎

1947点

VS

Bクラス 野中長男

1943点

「な、何だこの点数ホントにFクラスか！？」

翔太郎「ああ…本当を…マキシマムドライブ！」

『マキシマムドライブ！』

翔太郎「ライダーパンチ…！」

「ぐあああ！」

総合

Fクラス 左翔太郎

1937点

V S

Bクラス 野中長男

0点

翔太郎「ふつ…決まつたな」

数学

Fクラス 剣立カズマ

658点

V S

Bクラス 金田一祐子

159点

「な、何よこの点数差！」

カズマ「ゴメン…これも戦争だから…」

数学

Fクラス 剣立カズマ

658点

V S

Bクラス 金田一祐子

0点

物理

Fクラス 如月弦太朗

749点

V S

Bクラス 里井真由子

152点

「ちよつ…！こんなの勝てるわけ…！」

「もらつたあああ！」

物理

Fクラス 如月弦太朗

749点

V/S

Bクラス 里井真由子

0点

弦太朗「しゃあっ！」

得意科目で快進撃を見せ付ける弦太朗たち。だが、それには分けがあつた…

弦太朗たちの作戦は自分たちの得意科目の担当の先生を早くつかまえて、一気に攻めるシンプルなものだが、Bクラスに奪われたら最後…彼らは補習室送り決定だ。

秀吉「明久、ワシらは教室に戻るぞ」

明久「ん? なんで?」

秀吉「Bクラスの代表じゃが…」

明久「根本恭一のこと?」

秀吉「うむ」

明久「……なるほど。戻つておいたほうが良さそうだね」

秀吉「雄二に何かがあるとは思えんが、念のためにの」

明久「分かつたよ。姫路さんと弦太朗くんたちに一言言つておくよ」

明久「……うわ、こりや 酷い」

秀吉「まさかこうくるとはのう」

明久「卑怯、だね」

教室に戻った明久たちの目の前に広がる光景は、穴だらけの卓袱台

と壊れたシャーペンや消しゴムがあった。

弦太朗「なんてことしやがる…」これじゃあ補給は無理じゃねえか

…！」

映司「……やられたね、Bクラスの根本くんたち…」

ワタル「器の小さい人ですね。」

雄二「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

明久「それはそうと、どうして雄一は教室がこんなになつてているの気づかなかつたの？」

雄二「協定を結びたいという申し出があつたからな」

アンク「協定だと…？」

雄二「ああ。四時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして続ければ明日の午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。つてな」

ユウスケ「それ、承諾したの？」

雄二「そうだ」

美波「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじやないの？」

雄二「姫路以外は、な」

美波「あ、そつか…」

雄二「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日だ」

映司「そうだね。」

アンク「この調子じゃ本丸は落とせそうにないしな」

雄二「その時はクラス全体よりも姫路個人の方が重要になる」

アスム「だから受けたんですか？」

雄二「そういうことだ。この協定は俺たちに取つてかなり都合が良

い

秀吉「明久。とつあえずワシらは前線に戻るわい」

明久「ん。雄二、あとよろしく」

雄二「おひ。シャーペンや消しゴムの手配をしておひ」

シンジ「なんか、まだまだ色々やつしきそつだな」

カズマ「そうだね。この程度で終わるとは思えないしな……」

カズマ「じゃあ、シンジ様をつけてねー」

シンジ「ああ、カズマもねー!」

「辰巳! 戻つてきたか!」

シンジ「じめん、それより戦況は?」

「まことになつている」

シンジ「え? ビリしてー?」

「島田が人質にとられた」

シンジ「何だつて…………?」

第7話 打ち碎け！Bクラスの野望ー前編（後書き）

明久「次回、「第8話 打ち碎け！Bクラスの野望ー中編」に、
フィリップ「スイッチ・オン…」

第8話 打ち砕け！Bクラスの野望ー中編（前書き）

バカテスト 英語

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希&左翔太郎の答え

『good better best
bad worse worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good gooder goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いてます。

goodやbadの比較級と最上級は語尾にerやestをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太&如月弦太朗の答え

『bad butter bust』

教師のコメント

『悪い』 『乳製品』 『胸』

剣立力ズマの答え

『I'm sorry』

教師のコメント

分からなかつたとは言え、誤る必要はないですよ。

第8話 打ち碎け！Bクラスの野望ー中編

シンジ「美波ちゃん！」

美波「た、辰巳…」

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ…」

シンジ「くつ…卑怯な真似を…！」

シンジは、どうやって美波を助けるか考え、そこにある作戦を思いつく。

シンジ「それなら、美波ちゃんを解放して代わりに俺を人質にしろ！」

美波「えつ…」

「ほう。ま、ぶつちやけ【イイツよりもアイツの方を捕まえれば戦力は大幅に減るしな…いいだろ？】

美波が解放されて、すれ違い様にシンジが呟く

シンジ「（俺に任せといて）」

美波「えつ…？」

「ようし、来たか…」

シンジ「ありがとう…」

「はあ？」

シンジ「現代社会で来てくれて…サモン！」

現代社会

Fクラス 辰巳シンジ

473点

VS

Bクラス 鈴木一郎

『サバイブ』

シンジの魔法陣からは、普段とは違う召喚獣が現れた
「なんだあの召喚獣！あんな青かつたか！？」

シンジ「進化したのさ…規定の点数を越えたからね！」

シンジの召喚獣は規定の点数を越えると召喚獣が「仮面ライダーナ
イトサバイブ」に、進化するのだ

シンジ「はあああ！」

「『やあやああーー！』」

シンジのナイトサバイブはダークバイザーヴィヴァイのソードでBク
ラスの一体の召喚獣を切り裂き、一人を補習室送りにした

シンジ「ふう…なんとかなったか…」

美波「あ、あの辰巳」

シンジ「ん？なに？」

美波「そ、その…さつきは、ありがとうーーー」

シンジ「どうかしたの？熱？」

美波「な、なんでもないわよ！／＼／＼」

シンジ「？」

その後、タイムオーバーにより、現在協定通りに休戦中である。

明久「戦況は？」

雄二「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もつとも、こちらの被害
も少なくはないがな」

康太「……（トントン）」

雄二「お、ムツツリーーか。何か変わったことはあったか？」

雄二「何？Cクラスの様子が怪しいだと？」

康太「……（コクリ）」

雄二「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

明久「雄二、どうするの？」

雄二「んー、そうだなー」

ちらりと時計を見ると、四時半だった

雄二「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言って脅してやればいいだろ」

明久「それに、僕らが勝つなんて思ってないだろうしね」

映司「ちょっと待つて」

雄二「ん？なんだ、火野？」

映司「確か、明日の再戦時刻まで試召戦争に関わることは一切禁止するつて、協定で結ばれてたじやないか」

雄二「大丈夫だ、バレやしない」

幸太郎「……なんか、嫌な予感がするな…俺も付いていっていいか？」

カズマ「あ、それなら俺も」

シンジ「俺もいくよ」

結果、明久、雄二、瑞希、ムツツリー、美波、幸太郎、カズマ、シンジのメンバーでCクラスに向かう。途中で、須川もいたので連れていくことにした。

（Cクラス教室）

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

小山「私だけど、何か用かしら？」

雄二「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

小山「クラス間交渉？ふうん……」

雄二「ああ。不可侵条約を結びたい」

小山「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本くん？」

シンジ「え？」

カズマ「根本つて……」

幸太郎「まさか……！」

根本「当然却下。だつて、必要ないだろ？」

明久「なつ！？根本くん！ Bクラス代表の君がどうしてここにー！」

根本「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を禁止したよな？」

明久「何を言つて

根本「先に協定を破つたのはそっちだからな？ これはお互い様、だよな！」

「長谷川先生！ Bクラス芳野が召喚を

須川「させるか！ Fクラス須川が受けて立つ！ サモン！」

カズマ「ふざけるな、根本！ 協定違反とは言え、お前たちもじクラスと手を組むなんて！ クラスは一対一のはずだ！」

シンジ「それに俺たちが来る前にCクラスの教室にいるなんて、どう考へてもおかしい！ お前こそ、あらかじめCクラスにわざと怪しい動きを見させて、俺たちをはめたんじゃないのか！」

雄二「無駄だ剣立、辰巳！ 根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに決まつている！」

根本「ま、そゆこと

明久「へ理屈だ！」

根本「へ理屈も立派な理屈の内つてな」

雄二「明久、ここは逃げた方がいい！」

明久「くそつ！」

根本「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！」

雄二「そいつはどうかな？」

根本「なに…！」

すると突然召喚フィールドがガラスが割れたような音を出して消滅した。

根本「召喚フィールドが消えた！？どうなつてやがる！」

雄二「悪いな、うちには相手が優勢な召喚フィールドだけをブレイクすることができる奴がいるんでな。須川だけ召喚させたのはその意味だ」

根本「な、なんだと！」

→Fクラス教室

ワタル「悪い予感が当たりましたよ。やつぱり向こうの罠でしたか…」

秀吉「うむ。…すまぬ高橋教諭呼び出してしまつて」

高橋「では、召喚フィールドを閉じてもよろしいでしょうか？」

ワタル「はい、ありがとうございました」

高橋先生は、召喚フィールドを閉じて、職員室に向かつた。

→再びFクラス教室

カズマ「くそつ！ 根本の奴…！」

シンジ「カズマ…この際怒つてたつてしようがないよ…」

弦太朗「根本め…なんて卑怯な野郎だ！」

雄二「すまない、皆。特に火野、お前の言うことに従つていれば…」

映司「もういいよ…。頭を上げて坂本くん。こうなつた以上このクラスともやるしかないし…」

アンク「映司の言う通りだ。だが、やつぱりFクラスにとつちゃ厳しいがな…」

幸太郎「根本の作戦が読めた…。きっとアイツは俺達が試合戦争を行っている間にこのクラスに協力させてワザと怪しい動きを俺達に見せて罠にかかるのを待つてたんだ」

アスム「え？でも、協定を結んでる間は…」

ワタル「考えてくださいアスム。協定の内容は「タイムオーバーした後、試召戦争に関する行為を一切禁止する」と言ったのです。つまり根本は、僕らが試召戦争をしてる間に協力させたんですから、結果的にはノーカンなんですよ」

雄二「ワタルの言う通りだ。確かに協定には試召戦争を終えた後に関する行為を禁止すると言ったからな。試召戦争の最中なら、協定違反はしていないからな。」

翔太郎「ちつ、分かってても何か納得がいかねえ…！」

雄二「怒つても、何の意味もない。Jクラスまで敵になった以上、同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にJクラス戦はきつい」

明久「それならどうしようか？　Jのままじゃ勝つてもJクラスの餌食だよ？」

秀吉「そつじやな…」

雄二「心配するな。向こうがそつくるなら、Jつかひだつて考えがある」

明久「考え方？」

雄二「ああ。明日の朝に実行する。日には日を、だ

この日はそれで解散となり、続きは翌日へと持ち越しになつた。

第8話 打ち碎け！Bクラスの野望ー中編（後書き）

明久「次回、「第9話 打ち碎け！Bクラスの野望ー後編」に、
照井「スイッチ・オン！」さあ、振り切るぜー。」

シンジにまさかのフラグが立ちました……

第9話 打ち碎け！Bクラスの野望！後編

雄一「昨日言つていた作戦を実行する」

明久「作戦？ でも、開戦時刻はまだだよ？」

今の時刻は午前八時半。開戦時刻は九時だ。

雄一「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

明久「あ、なるほど。それで何をするの？」

雄一「秀吉にコイツを着てもらつ」

そう言つて雄一が鞄から取り出したのは文月学園の女子制服だった。

秀吉「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじや？」

雄一「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装つてもらつ」

雄一「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

秀吉「う、うむ……」

秀吉は制服に着替えた後、明久と雄一と共にCクラスへ向かつた

（Cクラス教室）

秀吉『静かになさい、この薄汚いゴミ箱も…』

小山『な、何よアンタ！』

秀吉『話しかけないで！ゴミ臭いわ！』

小山『アンタ、Aクラスの木下ね？ ちょっと点数が良いからっていい気になつてるんじゃないわよ！ 何の用よ！』

秀吉『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるのが我慢ならないの！ 貴方達なんてゴミ箱で充分だわ！』

小山『なつ！ 言つに事欠いて私達にはゴミ箱がお似合いですって！？』

秀吉『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達

を相応しい教室に送つてあげよつと思つの』

秀吉『最も、戦闘力たつたの5のCクラス(『H』農家のおじさん)が、戦闘力1500のAクラス(ラティッシュ)に勝とうだなんて寝言は言わないことね。むしろ聞くだけ無駄だわ』

秀吉「これで良かつたかのう?」

雄二「ああ。素晴らしい仕事だった」

明久「でも、さすがにドラゴンボール〇のネタが流れた時はちょっとテンパつたけどね」

秀吉「明久よ…伏せ字しきれておれんぞ…」

明久「ゑ?」

午前九時。Bクラス戦が開始された。FクラスはBクラス前から進軍を開始した。雄二曰く、『敵を教室内に閉じ込める』とのことだった。

明久「姫路さん、左側に援護を!」

瑞希「あ、そ、そのつ……!」

瑞希は泣きそうな顔をしてオロオロしており、戦線に加わっていかつた。

明久「ま、まづい! 突破される!」

弦太朗「うおおおお!」

幸太郎「ハアアアアア!」

「ぐわあああ!」

明久「先生、ジラ…ずれてますよ

竹中「少々席を外します！」

明久「姫路さん、どうかしたの？」

瑞希「そ、その、なんでもないです」

弦太朗「なんでもないはずがないだろ……！」

幸太郎「何かあつたなら話して欲しいんだ。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし……」

瑞希「ほ、本当になんでもないんです！」

弦太朗「けどよ……」

「右側出入口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

瑞希「私が行きますっ！」

そう言つて瑞希が戦線に加わるつと駆け出したが……

瑞希「あ……」

急にその動きを止めてうつむいてしまつ。何かを見て動きを止めてしまつたらしく、三人は瑞希が見ていた方を目で追うと……腕を組んでこちらを見下す卑怯者　根本恭二の姿があつた

弦太朗「あいつは……！」

明久「根本くんがどうかしたのかな……？」

幸太郎「ん？あれって確か……」

三人が見た物は、3日前に瑞希が書いていた、

ラブレターだつた……

第9話 打ち碎け！Bクラスの野望！後編（後書き）

明久「次回、「第10話 打ち碎け！Bクラスの野望！怒りの反撃
編」に、」
後藤「スイッチ・オン！」

第10話 打ち碎け！Bクラスの野望！怒りの反撃編（前書き）

バカテスト 保健体育

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第一次性徵期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希＆土屋康太の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

如月弦太朗の答え

『16歳』

教師のコメント

君が言つてるのは、女性が結婚できる年です。

第10話 打ち碎け！Bクラスの野望！怒りの反撃編

明久「……なるほどね。そういうことか」

幸太郎「昨日の協定の話を聞いた時からおかしいと思っていたんだよ。アイツ（根本）が、そんな対等な条件の提案をしてくるなんてさ…。結局あの時点で既に瑞希を無力化する算段が立っていたわけか。」

弦太朗「それならあの協定だつてうなづける。瑞希が参加できないのなら、あの協定はBクラスが圧倒的に有利な条件だしな……」

明久「上手い方法だよ。合理的で失うものもリスクもない。」

明久「姫路さん」

瑞希「は、はい……？」

明久「具合が悪そだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけもらわないと」

瑞希「……はい」

弦太朗「じゃ、俺達は用があるから行くぜ」

瑞希「あ……！」

明久「面白い」としてくれるじゃないか、クズ野郎（根本）のクセに

明久＆弦太朗＆幸太郎「「「あの野郎、ブチ殺す！」」」

（Fクラス教室）

明久「雄二つ！」

雄二「うん？ どうした明久。 それに、如月に野上も」

明久「話しがあるんだ」

雄二「……とりあえず、聞こうか」

明久「もし、この戦いで勝つたら根本くんの制服を回収して欲しいんだ。ちょっと盗られたものを奪い返したいんだ」

雄二「相当な分けありだな……。いいだろう。で、それだけか？」

明久「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

雄二「さつきのと何か関係があるのか？」

明久「それは言えない。」

幸太郎「どうしても外して欲しいんだ……！」

弦太朗「頼む、雄二ーーこの通りだ！」

雄二「……条件がある」

明久「条件？」

雄二「姫路が担う予定だった役割をお前たちがやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させろ」

弦太朗「ああ、任せろ！」

幸太郎「必ず成功させるぞ……！」

明久「それで、僕は何をしたらいい？」

雄二「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。科目は何でもいい」

明久「皆のフォローは？」

雄二「ない。しかも、Bクラス教室の出入口は今の状態のままだ」

明久「……難しいことを言ってくれるね」

幸太郎「もし、失敗したら？」

雄二「失敗するな。必ず成功させろ」

弦太朗「へつ、そりやそつか」

雄二「それじゃ、上手くやれよ」

明久「え？ どこが行くの？」

雄二「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

幸太郎「それって、室外機の事？」

雄二「ああ。」

雄二「明久」

雄二「確かに点数は低いが、秀吉やムツツリーーのように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

明久「……雄二」

雄二「上手くやれ。計画に変更はない」

弦太朗「それじゃあ明久、お前の方はお前のやり方に任せるぜ」

明久「うん。弦太朗くんも幸太郎くんも頼んだよ」

幸太郎「ああ、任せろ」

明久は美波たちと共にDクラスの教室に向かった。

弦太朗「さて、俺達も……」

幸太郎「やるか……」

Dクラスの教室にて、

明久は召還獣を召還して、自身の召還獣で壁を殴り続けていた。

明久「はあっ！ んのあつ！ つう……つ！」

美波「アキ、時間がないわ、急いで！」

根本『お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

弦太朗『どうしたんだよ？ Bクラスの代表さんはそろそろギブアップか？』

根本『はア？ ギブアップするのはそつちだろ？』

幸太郎『どうだか…』

雄二『無用な心配だな』

根本『そつか？ 賴みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

雄二『……お前ら相手じや役不足だからな。休ませておくさ』

根本『けつ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

雄二『負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

明久『はああつ！』

根本『……さつきからドンドンと、壁がつるせえな。何かやつているのか？』

雄二『さあな。人望のないお前に对しての嫌がらせじゃないのか？』

根本『けつ。言つてる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

雄二『……態勢を立て直す！ 一旦さがるぞ！（如月、野上、頼んだぞ！）』

根本『どうした、散々ふかしておきながら一人だけ残して逃げるのか！』

美波「アキ、そろそろよ」

明久「うん。わかってる。……次できめる!」

明久「おおおおおおつ！」

明久は腹の底から力を込めて雄叫びをあげる。

雄二『あとは任せたぞ、明久』

午後三時ジャスト。怒りの反撃作戦が開始された。

明久「だああーーっしゃあーーっ！」

ドゴオツ！

根本「ンなつ！？」

明久「くたばれ、根本恭一ーーっ！」

美波「遠藤先生！ Fクラス島田が

「Bクラス山本が受けます！サモン！」

明久「くつ！ 近衛部隊か！」

根本「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だつたな！ お前らの奇襲はしつぱ！」

弦太朗&幸太郎「お前ら（近衛部隊）、邪魔だーーっ！」

「うわあああーー！」

弦太朗の召還獣フォーゼと幸太郎の召還獣F EW電王が、近衛部隊を蹴散らす。

根本「なつ！」

根本の後ろには、涼しい風が入るように窓が開けられていた。窓か

ら保健体育の先生とムツツリー二が教室に足を踏み入れる

康太「……Fクラス、土屋康太」

根本「き、キサマラ……！」

康太「……Bクラス根本恭一に保健体育勝負を申し込む」

明久「同じく、吉井明久！」

弦太朗「同じく、如月弦太朗！」

幸太郎「同じく、野上幸太郎！」

康太「サモン」

保健体育

Fクラス 土屋康太

441点 &

吉井明久

83点 &

野上幸太郎

276点 &

如月弦太朗

63点

V/S

Bクラス 根本恭一

203点

『リミットブレイク』
『フルチャージ』

弦太朗「怒りの口ケットドリルキーック！」

明久&幸太郎「うおおおお！」

根本「ぐわあああつ！」

今ここに、Bクラス戦はFクラスの勝利で終結した。

第10話 打ち碎け！Bクラスの野望！怒りの反撃編（後書き）

明久「次回、「第11話 卑怯者には神と悪魔と怒りの鉄槌を！」に、」

賢吾「スイッチ、オン！」

ヨーザー名変更しました。これからはネガ・ナハトです。よろしくお願いします！

第1-1話 卑怯者には 神と悪魔と怒りの鉄槌をー（前書き）

バカテスト 生物

問 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希＆アンクの答え

『？脂質？炭水化物？タンパク質？ビタミン？ミネラル』

教師のコメント

さすがです。アンク君は生物は特に優れていますね。

吉井明久の答え

『？砂糖？塩？水道水？雨水？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

火野映司の答え

『？明日のパンツ？今日のパンツ？昨日のパンツ？一昨日のパンツ
？ちょっとの小銭』

教師のコメント

君は人生をなめているんですか。あと、明後日のパンツは君にとって無くてもいいものなんですか？

第1-1話 卑怯者には 神と悪魔と怒りの鉄槌を！

（Bクラス教室）

雄二「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といふか。な、負け組代表？」

根本「……」

アスム「さっきまでの強気が嘘みたいですね」

アンク「はつ、いい氣味だ……！」

雄二「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

ざわざわ…

雄二「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。

ここがゴールじゃない」

映司「まあ、確かにねえ……」

雄二「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

根本「……条件なんだ」

雄二「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

根本「俺、だと？」

雄二「ああ。お前には好き勝手やつもらつたし、正直去年から田障りだつたんだよな」

雄二「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

雄一「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

根本「……それだけでいいのか？」

雄一「ああ。Bクラス代表がコレを着て言つた通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言つて雄一が取り出したのは、秀吉が着ていた女子の制服だつた。

根本「ば、馬鹿なことを言つたな！ この俺がそんなふざけたことを

……！」

『Bクラス全員で必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Fクラスライダー「「「あ、俺（僕）達も手伝うよ」」」

71

ユウスケ「あ、いけね手が滑つた。」
バキッ！

根本「グフオア！」

シンジ「あ、俺も」

バキッ！

カズマ「俺も」

バキッ！

幸太郎「俺は足が滑つた」

ゲシッ！

ワタル「あ、すいません、顔蹴っちゃいました」

ゲシッ！

翔太郎「わりい、クズ（根本）」ゲシッ！

映司「あ、ごめん脇腹蹴っちゃった」

ゲシツ！

アンク「…………うざい」

ゲシツ！

弦太朗「あ、わりい〇玉蹴つちました
チーン！」

根本「いい加減にしろお前らー！謝つといて、ワザと殴つたり蹴つたりしてんじやねえよ！あと、役二名本音ぶちがましてんじやねえよ！」

全員「「「うるさい」「」」

バキッ！

根本「バタンッ」

明久「よし、後よろしくね」

幸太郎「明久」

弦太朗「手紙はどうした？」

明久「ちゃんと返したよ。」

弦太朗「そうか…」

明久「……ありがとう」

幸太郎「え？」

明久「一緒に根本を倒すのに協力してくれて」^{クズ}

弦太朗「なんだ、そんなことか」

明久「え？」

幸太郎「あんなの、人として当然だろ？」

弦太朗「そうそう。あんなの前にして落ち着いていられる奴はいねえだろ…」

明久「幸太郎くん…弦太朗くん…本当にありがとう」

幸太郎と弦太朗は小さく笑い、明久に笑顔を見せ、明久も同じこと
をした……

幸太郎「ところで弦太朗」

弦太郎「あん？」

幸太郎「ああは言つても、いずれは友達になるんだろう？」

弦太郎「ああ、BクラスもCクラスも明日から友達だ！」

幸太郎「……根本は？」

弦太郎「卒業式の時に友達になる！」

第11話 卑怯者には 神と悪魔と怒りの鉄槌を！（後書き）

明久「次回、「第12話 決戦！Aクラス戦－交渉編」に、」
ユウキ「スイツチオン！」

第1-2話 決戦！Aクラス戦！交渉編

～Fクラス教室～

雄二「まずは皆さんに礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力がつてのことだ。感謝している」

明久「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

雄二「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

雄二「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじやないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

雄二「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

映司「え？ 誰と？」

雄二「やるのは当然、俺と翔子だ」

幸太郎「翔子つて、Aクラス代表の霧島翔子のことか…」

アンク「お前が勝つことができるのか…？」

雄二「まあ、アンクが言つとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

雄二「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつただろ？？」

まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかつた」

雄二「今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない」

雄二「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーーーっ！』

（Aクラス教室というか教室と言えるのかこの部屋）

優子「一騎討ち？」

雄二「ああ。Fクラスは試合戦争として、Aクラスに一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄二を筆頭に、Fクラス主力メンバー全員でAクラスに来ていた。

優子「うーん、何が狙いなの？」

雄二「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

優子「うーん……わかつたよ。何を企んでいるか知らないけど、その提案受けるよ」

明久「え？ 本当？」

優子「でも、こちらからも提案。代表同士だけでなく、お互い五人ずつ」

士「いや、お互い八人ずつだ」

優子「門矢くん？ それに、照井くんに後藤くんも……」

士「木下。ここからは、俺達が決めさせてもらうぞ」

優子「え？ うーん……しょうがなあ、ちよつと聞いてあげてもいい？」

雄二「ああ。いいだろ？」「

士「お互いハ人と言つたが、メンバーは、木下・佐藤・工藤・久保・俺・照井・後藤・霧島の、八人で行く」

ユウスケ「おい、待てよ士！ どうしてメンバーを平氣に明かすんだよ！」

士「なに……、こちらからメンバーを明かせば、お前たちもメンバーを明かしてもらうからさ」

明久「雄二、どうするの？」

雄二「……そうだな、うちからは、秀吉・如月・ムツツリー＝・姫路・小野寺・左・火野・俺でいこう」

士「そうか。そっちのメンバーは大体分かった」

雄二「ただし、勝負する教科はこちラで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

優子「え？ うーん……」

翔子「……受けてもいい」

優子「うわっ！ 代表！」

翔子「……雄二の提案を受けてもいい」

優子「あ、あれ？ 代表。いいの？」

翔子「……その代わり、条件がある。」

雄二「条件？」

翔子「……負けた方は何でも一つ言ひ」とを聞く

優子「じゃ、こいつようつへ。勝負内容は八つの内四つそっちに決めさせてあげる。」「

雄二「交渉成立だな」

翔子「……勝負はいつ?」

雄二「そうだな。十時からでいいか?」

翔子「……わかった」

雄二「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

明久「そうだね。皆にも報告しなきゃいけないからね」

士「ユウスケ」

ユウスケ「なんだ、士」

士「……面白いものが、見られそうだぞ」

ユウスケ「え……?」

士「まあ、楽しみにしていろ」

ワタル「ユウスケ、士さんと何を話してたんですか?」

ユウスケ「いや、面白いものが見られるって……」

アスマ「面白いもの、ですか?」

ユウスケ「ああ……。」

シンジ「それよりもああ、どうして俺達この世界に来た時本来とは異なるライダーになつてんのだろうな……」

カズマ「俺も思った……。何でなんだろう……」

ユウスケ「(……士の言った、面白いものと関係があるのかなあ?)」「

ユウスケは考え方をしていながらも、Aクラス戦は迫っていた……。

第12話 決戦！Aクラス戦！交渉編（後書き）

明久「次回、「第13話 決戦！Aクラス戦－波乱のライダー対戦
編 前編」に、スイッチ・オン！」

第13話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 前編

「Aクラス教室といふ名のすつげえ豪華な部屋」

高橋「では、両名共準備は良いですか？」

雄二「ああ」

翔子「……問題ない」

高橋「それでは一人目の方、どうぞ」

優子「アタシから行くよ！」

秀吉「ワシがやるつ」

Aクラスの一人目は、

木下優子。対するFクラスは木下秀吉。秀吉はなぜか、アタッショ
ケースを持っていた。

ワタル「ユウスケ、気になるんですか」

ユウスケ「ああ……、土の言つた「面白いもの」。一体何のことなん
だ……？」

カズマ「それよりも、秀吉が持つているケース。どこかで見たこと
がある気が……」

シンジ「あれっ？ あれって確か……」

優子「ところでさ、秀吉」

秀吉「なんじや？ 姉上」

優子「Cクラスの小山さんって知ってる?」

秀吉「はて、誰じゃ?」

優子「じゃーいいや。だったら、力ずくでも白状させてあげるわ…！」

すると、優子の腹部に仮面ライダー・アギトのベルト……“オルタリング”が、出現する。

ユウスケ「な!?あのベルトは…！」

秀吉「姉上…手加減はせぬぞ」

秀吉はアタッシュケースから、“ファイズギア”と“ファイズフォン”を取り出す

シンジ「やつぱり…、ファイズの…！」

秀吉はベルトを巻き、ファイズフォンに暗証番号『555』を、入力して、ファイズフォンを持った右手を高く上げる。

そして、優子と秀吉は、変身のキーワードを同時に叫んだ

秀吉&優子「変身！」

優子はオルタリングの両サイドを押し、秀吉はファイズフォンをベルトに装填させ、召還フィールドに、『仮面ライダー・アギト』と『仮面ライダーファイズ』の二体が誕生する。

ワタル「アギトに…、ファイズ…」

ユウスケ「士!これがお前の言った面白いものなのかな!」
士は「ふつ、」と笑つた。

アギト「覚悟はいいわね?秀吉」

ファイズ「姉上も、後悔するでないぞ…」

アギト「言つたわね…じゃあ、行くわよー。」

ファイズ「！」

アギトとファイズはパンチとキックを繰り出しながら攻防戦を繰り広げる。

アギト「たあつ！」

ファイズ「ぐつ…、はあ！」

アギト「きやつ！」

アギトはファイズの顔面に左ストレートを当て、ファイズは倒れるが、即座に脚払いを喰らわせる。

アギト「やるじゃない、秀吉」

ファイズ「姉上もな…」

アギト「けど、これでどう？」

アギトはベルトの右側の方を叩くと、赤を基調とした、『フレイムフォーム』に、フォームチエンジし、さらに、ベルトから専用武器『フレイムセイバー』を出現させ、装備する。

ファイズ「なつ…！」

アギトF「ふふ、さすがの秀吉も諦めたようね…ハアアアアッ！」

ファイズ「くつ…！このままでは…！」

絶対絶命のピンチを迎えたファイズ。

すると、生徒の観客席からカズマがファイズエッジの柄の部分をファイズに投げる。

カズマ「秀吉ーーーこれ、受け取つてーーー！」

シンジ「カズマそれどこから取つてきたのーー？」

カズマ「そこから、無理矢理…」

オートバジン『ガガーピー・バチツ、バチツ』

全員「お前何してんのーーつー?つーか、いろんな意味ですげえ!!」「

『ready』

ファイズエッジを受け取ったファイズはミッションメモリーを装填し、ファイズエッジの刃を出現させ、切りかかつて来たアギトのベルトのちょっと上の部分にファイズエッジの刃を当てる。

『エクシードチャージ』

ファイズはファイズフォンの『ENTER』ボタンを押して、ファイズエッジの刃にエネルギーを送り込み、そして、ファイズエッジを左片手で横一文字に切り裂くように振る。

ファイズ「……ワシの勝ちじゃ」

アギト「ひでよ……し、」

すると変身が解け、優子の姿に戻るが、優子は気絶して、倒れてしまうが、変身を解除した秀吉が受け止める。

高橋「一回戦、Fクラスの勝利です」

ワアアアア!

観客席からは、Fクラスの生徒たちが、歓喜の声をあげた。

映司「やつた!秀吉君の勝ちだ!」

アンク「喜ぶのはまだ早い…こうなった以上、相手も仮面ライダーで来るんだからな」

ワタル「少なくとも五勝しなければいけませんからね…」
シンジ「あと四勝か…」

高橋「では、次の方どうぞ」

佐藤「私が出ます。科目は物理でお願いします」

雄二「よし、お前の出番だ、如月」

弦太朗「よつしゃ！任せろ！」

雄二「如月、変身しても攻撃で点数が減る。立っていられたとしても、先に〇点になつたら負けだ。」

弦太朗「ああ、わかつたぜ」

賢吾「佐藤、如月はFクラスと言えど、物理は奴の得意教科だ。油断するな」

ユウキ「頑張つてね、美穂ちゃん」

佐藤「はい。」

弦太朗「よおつ、物理を選んだのは、俺のことを気遣つてくれたからか？」

美穂「いいえ、私の得意教科だからです」

弦太朗「そうか、俺も物理が一番得意なんだじょ、その点数で相手になるかなあ…」

佐藤「何を言つて…」

弦太朗「じゃあ、行くぜ！」

弦太朗はフォーゼドライバーを腰に巻き付けて、四つのスイッチを押す。『3』

『2』

『1』

弦太朗「变身！」

弦太朗は右手でレバーを動かし、右手を上げて、『仮面ライダーフオーゼ』に、変身する

フォーゼ「宇宙キターッ！」

全員「「「なにあの、仮面ライダー！？」」

佐藤「……変身」

『open up』

佐藤は『仮面ライダー ラルク』に変身したものの、フォーゼのインパクトが強すぎたために地味になってしまった。

二人が変身すると、頭上とモニターに点数が表示された

物理

Aクラス 佐藤美穂

389点

V.S

Fクラス 如月弦太朗

781点

『な、何だあの点数！』

『バカな！本当にFクラスの奴が採れる点数かよ、あれ！』

ユウキ「賢吾くん……！」

賢吾「予想外だな……まさか奴がこれ程のものとは……」

ラルク「くつ……！」うなつたら、一気に！

『マイティ』

ラルクは一枚のカードをスラッシュする。すると、ラルクラウザーのボウガンの弾丸にエネルギーが溜まる。

フォーゼ「よつしゃあ、行くぜ！」

フォーゼは高くジャンプして、一つのスイッチをオンにする

『ロケット・オン』

『ドリル・オン』

すると、フォーゼの右腕にロケットモジュールが装備され、左脚にドリルモジュールが装備され、フォーゼは左手でレバーを動かす『リミットブレイク』

ラルク「ハアアアアツ、ハアツ！」

ラルクは必殺技『レイバレット』をフォーゼに向けて撃つ。
フォーゼ「ロケットライダードリルキイーーツク！」

フォーゼは、レイバレットの弾丸をいとも簡単に粉砕し、そのまま必殺技をラルクにかます。

ラルク「キャアアアツ！」

ラルクの变身が解除され、フォーゼも变身を解除して、弦太朗は佐藤のもとに寄り、手を伸ばす。

弦太朗「なかなか、よかつたぜ。」

佐藤「……次は負けんません」

高橋「二回戦、Fクラスの勝利です」

ワアアアアツ！

カズマ「よし、これで二勝だ！」

シンジ「それにしても、凄いライダーだつたな……」

ユウスケ「ああ。士は知ってるのかな？」

ワタル「知らないと思いますよ……。」

三回戦

保健体育

Aクラス 工藤愛子

VS

Fクラス

土屋康太

続く

に

第13話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 前編（後書き）

明久「次回、「第14話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦
編 中編」に、」
雄二「スイッチ、オン」

サブタイトルは、
「波乱のライダー対戦」
ではなく、
「波乱のライダー大戦」
が、正解です。
誤字すいませんでした。

第14話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 中編

高橋「では、三人目の方どうぞ」

康太「……（スック）」

愛子「じゃ、ボクが行こうかな」

Fクラスからは、ムツツリー二こと、土屋康太。対するAクラスからは、一年の終わりに転入してきた工藤愛子が出てきた。

ユウスケ「あの二人も仮面ライダーなのかな…」

ワタル「その可能性はありますね。……ところで、キバットはどうにいったんでしょうか。」

アスム「え？この世界に来た時から一緒にいたんじゃないんですか？」

ワタル「いえ、この世界に来た時はぐれてしまつたんですよ。その代わりに？世がいるんですけどね」

キバット？世「……」

愛子「土屋君だっけ？ 隨分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子「でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？ ……キミとは違つて、実技で、ね！」

ユウスケ「なにあの子！？自分で放送コードギリギリの事言つてゐるのに気付いてないの！？」

愛子「そっちのキミ、小野寺君だっけ？ 保健体育で良かつたらボクが教えてあげようか？ もちろん実技で」

ユウスケ「ええつ！ ん～と、じゃあ、よろしくおねがい！」

ワタル「ユウスケにはそんな機会ありませんから、必要ないですよ」

海東「そうだよ。小野寺君には必要ないね」

士「ああ、全くだ」

ユウスケ「ねえ、泣いてもいい?」

高橋「そろそろ開始して下さい」

愛子「はーい。じゃ、変身つと」

愛子は、クウガの变身ベルト『アークル』を出現させ、左側にあるスイッチを押して、『仮面ライダークウガマイティフォーム』になる。

ユウスケ「なつ…! クウガだつて! ? 愛子ちゃん、やつぱり俺に実技を」

士&海東&ワタル「「「必要ない!」」」

ユウスケ「○○○」

康太「……キバット」

キバット? 世「しゃあつー行くぜ、康太!」

ワタル「キバット! あなたなにしてるんですか!」

キバット? 世「あれ、ワタル…それになんで親父まで?」

キバット? 世「簡単に言えば、今の俺の主人はワタルであり、今のお前の主人はそいつなのだろう?」

キバット? 世「うん、まあ、そんな所だな」

康太「……キバット」

キバット? 世「ん? ああ、わりい。んじゃ、ガブツ!」

康太「……変身」

康太は「仮面ライダー キバキバフォーム」に変身した。

保健体育

Aクラス 工藤愛子

446点

V/S

Fクラス 土屋康太

572点

明久「凄い！これなら、ムツツリー二が有利だ！」

雄二「どうだろうな…。力の差は、技術でカバーするからな。向こうの技術がどれほどものかにもよるしな。」

クウガMは、パンチ攻撃を中心に行め続けるのに対し、キバKは、キック攻撃で攻撃と防御を同時にを行い、クウガMを攻め続ける。

明久「雄二、この戦いは

雄二「ああ、パワーだけでなく、テクニツクもムツツリー二の方が上だ。この勝負、ムツツリーニの勝ちだ！」

雄二がそう言つと、キバKは、『ダークネスマーンブレイク』を、クウガMに喰らわし、見事勝利を収めた。

高橋「三回戦、Fクラスの勝利です」

ウオオオ！

映司「凄い！これで三勝だ！」

シンジ「あと、一勝か…」

高橋「これで3-0ですね。次の方は?」

瑞希「あ、はい、私です!」

久保「それなら僕が相手をしよう!...変身『

『コンプリート』

久保は『仮面ライダーデルタ』に、変身する。

瑞希「銃系のライダー...だつたら...!」

瑞希「リュウタロス、お願いします!」

ユウスケ「え?リュウタロスって...」

すると、突然瑞希は、紫色のオーラのような物体に取り憑かれ、髪の毛が紫色になって、派手なDのような格好になり、さらには、性格と声も変わった。

瑞希R「お前、倒してもいいよね? 答えは聞かないけど...」

『ガン・フォーム』

瑞希が巻いたベルトから変わった音楽が流れ、バスをかざし、『仮面ライダー電王ガンフォーム』に変身する。

その後、電王Gの勝利で、四回戦も勝利を収めた。

高橋「四回戦、Fクラスの勝利です」

ウオオオ!

映司「やつた!これであと一勝すれば...!」

幸太郎「どうだろうな……次は勝てるかどうか難しいぞ」

映司「え？ 次の相手つて……？」

翔太郎「ついに来るか……門矢士！」

海東「士、もう勝つしか手はないよ」

士「分かつている。Aクラスが落ちこぼれ（Fクラス）に負けつ放しつてわけにも行かないしな。それに、いい加減Fクラスのモブ共にはイラついていたんだ。ここで勝つて、一気に黙らせてやる……！」

「！」

雄一「小野寺、……任せたぞ」

ユウスケ「ああ、任せてくれ！」

高橋「では、両者前へ」

士「よお、俺の相手はお前か……ユウスケ」

ユウスケ「まさか、お前だとはな……士」

士「先に言つておくが、俺はアイツらほど甘くはないぞ」

ユウスケ「……知ってるさ。なにを今更」

士「お前たち落ちこぼれが、学年最上級クラスに勝てないと云う現実を見せてやるよ……変身」

ユウスケ「言つたな……Fクラスはただの落ちこぼれじゃない」と、見せてやる……！ 变身！」

士は、『仮面ライダー ディケイド激情態』に変身し、ユウスケは、『仮面ライダークウガアルティメットフォーム・ブラックアイ』に変身した。

二人は駆け出し、お互いの拳を振りかぶった。

士「ハアアアアツ！」

ユウスケ「ウオオオオツ！」

第15話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 後編
に、続く……。

第14話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 中編（後書き）

本当は、電王VSデルタの戦闘描写は存在していたんですが、作者が間違えて電源ボタンを押してしまい、結局戦闘描写をカットしてしまいました。

誠に申し訳ございません

第15話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 後編

「ディケイド激情態」「はあっ！ やあっ！ たあっ！」

クウガU.B 「はあっ！ おりやあつ！ てやあっ！」

『す、凄い。今までとはワケが違うぞ……！』

『ああ、お互い本気だよな…一体、どっちが勝つんだ…！？』

「ディケイド激情態」「はあああ…！」

クウガU.B 「オリヤアアツ！」

お互いの蹴りが同時にヒットし、火花を散らし、フィールドの端まで横向きに転がる。

「ディケイド激情態」「ぐあああ…！」

クウガU.B 「があああ…！」

「ディケイド激情態」「ふつ、中々やるな…落ちこぼれの割りにはな…」
クウガU.B 「落ちこぼれだから…まともにやり合えるのか、学年最上級クラスさん？」

「ディケイド激情態」「だがな…」

クウガU.B 「？」

「ディケイド激情態」「落ちこぼれといつまでも遊んでるわけにはいかないんでな…！」

ディケイド激情態は、右腕にエネルギーを溜め始めた。

クウガＵＢ「ハアアアア……」

同じく、クウガＵＢも、右腕にエネルギーを溜め始めた。

ディケイド激情態「ウオオオオツ！」

クウガＵＢ「ハアアアアツ！」

お互に、走り出し、パンチを繰り出した。

ディケイド激情態「ダアアアアツ！」

クウガＵＢ「ハアアアアツ！」

互いのパンチがぶつかり、広範囲に爆発が広がり、召喚フィールドがブレイクする。

明久「うわあああ！　もうこれ、試召戦争でもなんでもないじゃん！　ライダー大戦じやん！」

秀吉「今更言うことでもなからう！」

美波「それで、どっちが勝ったの！？」

全員が中央に目をやると、ディケイド激情態とクウガＵＢが、互いのパンチを顔面にぶつけたまま立っていた。だが、点数の方は……

世界史

Aクラス 門矢士

1点

V.S

Fクラス 小野寺ユウスケ

0点

高橋「五回戦、Aクラスの勝利です」

Aクラス「「ウオオオ！」」

映司「だ、大丈夫、まだ、一敗だから何とか…」

翔太郎「どうかな…次、勝てるかどうか分かんねえぞ…」
ワタル「えつ？ 次つて確か翔太郎さんですよね？」

翔太郎「ああ。だが、いろんな意味で勝てる気がしねえ……」

高橋「では、六人目の生徒は前へ、」

照井「俺が行こう。科目は奴の得意教科英語で頼む」

亞樹子「キヤーーッ！竜ーーーん！ 皆打ち合わせ通り行くよ！
せ～の、」

Dクラス「「竜ーーーん！」

翔太郎「……Fクラス左翔太郎（泣）」

照井「左……大丈夫か？」

翔太郎「大丈夫じゃねえ……（泣）」

照井「左、正直に言うが、俺だつて恥ずかしいんだ…」

翔太郎「でも、なにこの完全なアウェイ…よく聞いたら、亞樹子と
Dクラスだけじゃなくて、A、B、C、E、更には俺のクラスのF

クラスまで、なぜかお前応援してるし……（泣）」

照井「……左、棄権するか？」

翔太郎「……ああ。（泣）」

高橋「六回戦、Aクラスの勝利です」

Fクラス「「ええーー、あの負け方はねえだろお」「」

翔太郎「お前らのせいだろーーーっ！…」

照井「（左、いろんな意味でホントにスマン。）」

第16話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 決着編
に、続く……。

第15話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 後編（後書き）

翔太郎の完全アウエイ。Dクラスは、亜樹子の手によって、照井の事に関しては、侵略済みです。

次回は、遂に決着編です。どんな展開が起こるのでしょうか……。
ギャグ？ それとも シリアス？
どっちなんだか……。

第16話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 決着編

後藤「照井が終わりで…次は俺か。」

海東「頼んだよ、バース君。」

後藤「ああ、任せろ！」

雄二「次は火野、お前だぞ…」

映司「うん。英語も日本史もとられたけど、どんな教科がこようとも、オーブの力で押し切つてみせる！」

雄二「その意気だ。頼んだぞ！」

高橋「では、両者共前へ」

映司「後藤さん…！Fクラス勝利のためにも、俺が勝ちます！」

後藤「火野…手加減はしないぞ！」

映司「ええ、ならどんな教科で来てもいいですよ

後藤「そうか…なら、」

映司「あ、できれば生物いが」

後藤「生物でお願いします」

映司「…」

生物

Aクラス 後藤慎太郎

283点

VS

Fクラス 火野映司

後藤さんって、案外鬼畜。 b y火野映司

高橋「では、これより、最終戦を始めます。両代表前へ」

翔子「……はい」

雄一「俺の出番だな」

高橋「教科はどうしますか?」

雄一「日本史で頼む」

高橋「では、始めてください」

高橋先生がそう言つたあと、翔子のもとに『カブトゼクター』が飛来して翔子はカブトゼクターをキャッチする。

翔子「……変身」

『HENSHIN』

翔子「……キャストオフ」

『cast off』

『change beetle』

翔子は『仮面ライダー カブトライダーフォーム』に、変身した。

ユウスケ「なつ…！ カブトだつて！」

ワタル「クロックアップ使われたら終わりですね」

幸太郎「こうなつたら、雄一もカブト系のライダーになつてもいいから
しか…」

雄一「変身！」

雄一は『仮面ライダー 龍騎』に変身した。

Fクラスライダー「「「ゆううじいい…！」」「」

カズマ「駄目だ…終わった。おー」

アスマ「まだです！」

ワタル「アスマ…？」

アスマ「あれを見てください…。」

Fクラス「「「？？？」」「」

Fクラスの生徒全員は、アスマが指を指した方向に目をやると点数
が表示されたモニターを見てみた。

日本史

Aクラス 霧島翔子

315点

VS

『すげえっ！ 霧島翔子を越えたぞ！』
『これならいけるぞ！』

カブトR「くつ…！」

龍騎「どうした翔子？ 遠慮なんてしなくていいんだぞ。クロックアップを使いたくば、使えばいいだろ？」

カブトR「……雄二ー！」

『clock up』

カブトR「ハアツ、タアツ、ヤアツ！」

龍騎「ぐつ…ぐおつ、ぐあつ！」

ユウスケ「まざい！」のままだと……

『1、2、3』

カブトR「……ライダー、キック」

『R i d e r k i c k』

カブトR「……ハアアアアツ！」

ドオオオオン！

『　　』
『　　』
『　　』
『　　』
『　　』

沈黙の空気が、教室内に流れる。

ユウスケ「！　いない！？」

カブトR「……！？」

確かによく見ると、そこに龍騎の姿はない。
では、どこに？

……それは、

龍騎「ここだ、翔子」

契約モンスター『ドラグレッター』と共に、上空にいた。

龍騎「間一髪だつたぜ……お前のライダー・キックを喰らう直前に『ガードベント』で、防いで、喰らつた瞬間上空に上がって『ファイナルベント』を発動したのさ！」
カブトR「……そんな！」

龍騎「俺の勝ちだ、翔子！」

龍騎「ウオラアアアツ！」

ドオオオオン！

日本史

Aクラス 霧島翔子

0点

V S

Fクラス 坂本雄二

高橋「……5 3で、Fクラスの勝利」

ウオオオオツ!!

ユウスケ「やつたあああ！」

カズマ「遂に、念願のシステムデスクだーっ！」

ワタル「やりましたね、アスム！」

アスム「はいっ！」

弦太朗「いよっしゃあああ！」

タクミ「そんな…僕達Aクラスが…」

海東「参ったね。Fクラスを見ぐびりすぎていたよ…」

フィリップ「彼らに、教えて貰つたね…」

照井「ああ…」

後藤「学力だけが、全てじゃないってことか…」

賢吾「…」

ユウキ「賢吾君…」

雄一「さあ、勝つた方はなんでも言つ」とを聞くんだろ?」

士「……一つだけな」

雄一「そうか、じゃあ、頼んだぞ……如月」

弦太朗「おうつ！」

Aクラス『！』

なぜ、弦太朗が……！？
次回、第17話
に、続く……。
FとAは、最高の友達！？

第16話 決戦！Aクラス戦！波乱のライダー大戦編 決着編（後書き）

映司 VS 後藤さん

ギャグ

雄二 VS 翔子

シリアルス

という結果になりました。

完全オリジナルです。

次回はどんな展開が待っているんだか……。

第17話 FとAは、最高の友達！？

Aクラスの教室は、異様な程に騒がしかつた。それもそのはず。なぜなら……

賢吾「どういふことだ…如月！」

そう、負けた方はなんでも一つだけ言つことを聞くのだが、勝つた方からは何故か、弦太朗が願いごとを決めるらしいのだ。

ざわざわ…

弦太朗「そろそろいいか…？」

賢吾「どうせ、Aクラスの設備が欲しいんだろ…。さっさと持つていけ！」

弦太朗「うーん まあ、それもあるんだけどよ…それは、この試合

戦争で決められていることだろ？ そうじやなくてさ…」

賢吾「ならなんだと言つんだ」

弦太朗「ああ、そいつはな……」

弦太朗「Fクラスの設備をAクラスと一緒にしたうえで、FクラスとAクラスの教室を合体させて、AFクラスにする！これが、俺達Fクラスの願いだ！」

賢吾「はつ……？」

Aクラス「「「はあああつ！？」」」

賢吾「どうぞ」とだ如月一。

「おお、おお、おお」と、春の語る言葉の現象がでまかし

後藤「教室を合体させて、」

יְהוָה יְהוָה יְהוָה

弦太朗「おう、そうだ。そうすれば、そつちも設備が替わることなく、いつも通りに勉強ができるだろ?」
タクミ「確かにそうではあるけど……」

アクリズ「？」

弦太朗「元々こうなるように、交渉の時に細工してくれたんだぜ。」

な
士?」

士「ああ、それについて否定はしない……」

Aクラス「「なにいいい!」「」

海東「士! どういうことだ!」

ユウスケ「最初からこれを狙つてたのか……?」

士「考えてみる。勝ち抜きの団体戦なのに、偶数のメンバーはおかしいと思わないのか?」

アンク「確かにな……」

士「もし、俺達が勝つてしまつたらどうする? そうなつた場合は、今頃Fクラスはみかん箱になつていたかも知れないしな。」

士「だから、対戦方式も召喚獣ではなく、ライダー同士の戦いにしたのさ。そうすれば、学力が劣るFクラスでも、勝つことができるからな。ハ対ハにしたのも、ちょうどよくするためだ」

ユウスケ「そ、そうだったのか……」

海東「でも、何故Fクラスなんだい?」

士「弦太朗の紹介だ。確かに落ちこぼれとはいつたが、こいつもは一人一人生き生きしている。俺は思った。こいつもは努力すれば、絶対伸びる! だからこそ弦太朗と約束したのさ…… FクラスはAクラスの皆と友達になる。つてな……」

士「そして今、約束は果たした。友達の願いを、友達としてな!」

明久「友達、か……」

雄二「そいつも、悪くはねえな……」

秀吉「むしろ大歓迎じゃな」

康太「……（「クリ）」

瑞希「友達……」

美波「うん、いい言葉ね！」

翔子「……皆は？」

愛子「そりやあ、もちろん」

優子「断る理由なんてないでしょ？」

久保「なんたつて友達だからね」

士「だそうだ、弦太朗」

弦太朗「いよっしゃあ、今日からFクラスは、Aクラスのみんなと、これから友達だ——つ！！」

次回、第18話 誕生！AFクラス
に、続く……。

第17話 FとAは、最高の友達！？（後書き）

考えたこともないオリジナル展開。
AFクラス。果たして、どんな喜劇を見せてくれるんだか……。

第18話 誕生！AFクラス

翌日。Aクラスとの試合戦争をFクラスの勝利という形で幕を閉じたのは既に昨日の話。さて、本日Fクラスは晴れてボロい教室から解放されて、Aクラスの教室で、Aクラスと同じ設備のもとで勉強することができるFクラス。これも全て、Fクラスの如月弦太朗とAクラスの門矢士のおかげである。因みに、クラスが合体したためにクラス名は、AクラスとFクラスをそのまま組み合わせた、『AFクラス』となつた。

（AFクラス教室）

明久「うわあ～凄いなあ、これからシステムデスクで勉強ができるのかあ～」

秀吉「これも全て、弦太朗と士のおかげじゃな」

康太「……（「クリ）」

弦太朗「よおつ…皆おはよう…」

明久「おはよう、弦太朗君」

秀吉「おはようなのじや」

康太「……おはよう」

雄一「よおつ、学園の革命児さん」

弦太朗「よせよ。普通に弦太朗って呼んでくれ」

雄一「そうか。分かつたぜ弦太朗（革命児）」

弦太朗「……ホントに分かつたのか？」

明久「それにしてもさあ、明るいよね」このクラスって

翔太郎「ああ、特に男子がな」

アスム「えつ？どうしてですか？」

明久「だつて……」

「

『姫路さん、今日も美しいですね！』

『霧島さん、スッゴく美人ですね！』

『ユウキさん、こっち向いてーっ！』

『工藤さん、保健の実技教えグフオア！』

ユウスケ「愛子ちゃん、クウガの事もっと教えてあげるから、代わりに実技を！」

A Fライダー「…………」「

この後ユウスケは、A Fライダーの一斉必殺技でフルボツ「」されました。

高橋「それでは、皆さん全員出席していますね。朝のHRの前に、学園長からお話があります。では、学園長」

藤堂「あいよ。皆今日からはA Fクラスとして授業を受けるわけだが、一つだけお知らせがある。まず、このA Fクラスの存在が気に食わない生徒が多数いることが分かった。」

士「そいつは、やっぱりFクラスが優遇されているってことか？」

藤堂「そうだよ。落ちこぼれのFクラスがAクラスの設備と可憐い女子生徒と一緒に授業を受けることが気に食わない奴がいるのさ」

A F男子「おいちょつと待て、後者の方単なる男子の嫉妬じやねえか」「

士「一応聞くが、前者の方は主に誰が言つたんだ？」

藤堂「確か、Bクラスのねも……」

A F 全員 「 「 「 もつこいです言わなくて」 」 」

藤堂「まあ、こんな感じで色々不満に持つ奴がいて、クレームを言つてきてうんざりしてるから、あんた達に言つておきたいことがあるんだよ」

士「それは何だ?」

藤堂「今後の試験戦争でA F クラスに勝ったクラスは、AかFのどちらかを引きずり降ろして、Aクラスの設備が手に入れることができるようにしたから、よろしく頼むよ。アタシからの話は以上だ。勉強がんばりな……」

士「ちょっと待て、おいババアアアアツ!」

ユウスケ「つまつさあ……」

……

ユウスケ「俺達は、今日から他のクラスに狙われるってことだよな

A F クラス 「「ウゾダンドンドードーンー！」」

次回、第19話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 準備編

第18話 誕生！AFクラス（後書き）

だんだん皆のキャラ崩壊速度が上がってきている気がする。

次回は、清涼祭編なわけだが、清涼祭編といえば作者の嫌いな“アイツら”が出てくる話でもあります。バカテスを良く知る人なら絶対ヤツらだと、すぐに気付くはずです。

さて、どうやつていたぶつてやろうか。

? ? ? & ? ? ? 「 つて、オイ！」

第19話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 準備編（前書き）

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

如月弦太朗の答え

『友達』

火野映司の答え

『明日のパンツ』

左翔太郎の答え

『ハードボイルド小説』

門矢士の答え

『プロ並みの写真の撮影技術』

ワタル＆アスムの答え

『思い出』

剣立力ズマの答え＆辰巳シンジの答え

『出し物の売り上げ金』

尾上タクミの答え

『出番』

小野寺ユウスケの答え

『Hなほ……成人向けの雑誌』

教師のコメント

ワタル君とアスム君以外は後で職員室に来なさい。如月君はいじめの相談なら後で個別で話し合いをします。

第19話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 準備編

5月某日。

文月学園では、新学年最初の行事である文化祭『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

殆どのクラスは出し物が決まり、早いクラスは準備に取りかかっている。さて、我等がAFクラスはどういふと……

ユウスケ「士！今朝俺の目覚ましの電池抜きやがったな！」

士「授業中寝ているから、グッスリ寝させてやるひつと思つたんだがな。いけなかつたか？」

ユウスケ「当たり前だ！昨日8時に寝たんだから充分寝られるかと思つて、朝8時にセットしたら時計見たら昨日の10時辺りに止まつていたし！」

海東「待ちたまえ小野寺君！寝るの早過ぎだよ！」

ワタル「しかも起きる時間遅いですね」

と、こんな感じではしゃいでいて、出し物所の話ではなかつた。

だが、次の瞬間……

鴻上『やあ、諸君！清涼祭の出し物に困つてゐる所だね！』

「「「なんか、急に変なの出てきた————」」

AFクラスの教室のモニターと全てのシステムデスクをジャックしてきて画面に現れたのは、文月学園のスポンサーの一社である『鴻上ファンデーション』の会長、鴻上先生その人であつた。

映司「あれっ！？鴻上さんもこの世界に来てたんですか！？」

鴻上『当たり前じやないか！我々鴻上ファウンデーションは、文月学園のスポンサーでもあるのだよ！』

映司「そ、そうなんですか。ていうか、相変わらずケーキ作るのすきですね。」

鴻上『今度清涼祭の屋台で出して欲しいと頼まれたんだよ。楽しみにしていろといい。』

鴻上『わい、本題に入らうか…木下ゆううー君…』

優子「うえええ！つて、アタシ…ですか？」

鴻上『そんなに驚く必要はないよ優子君』

優子「（普通急に呼ばれたら誰でも驚くと思つんだけど…）

鴻上『では、優子君。A-Fクラスの出し物の話はどこまで進んでいるかな？』

優子「それが…皆はしゃいでぱっかりで出し物所の話じゃないんですけど…」

鴻上『ふ～む、そうか…優子君、耳を塞ぎたまえ』

優子「へつ？」

鴻上『君たち！しげいにすかにしたまえええー…』

キーン！

明久「あう…耳が…」

雄二「いきなりなんて大声出しあがるんだあのオッサン…！」

鴻上『さて、清涼祭の出し物だが君達AFクラスが決まっていなかつた場合の事を考えて私はある人物に助つ人を頼んだんだよ。もうすぐ来るはずなんだが……』

鴻上がそう言うと教室に一人の男が入ってくる。

伊達「いや～ここが、AFクラスか～広いね～」

入つて来たのは、文月学園の保健体育教師“伊達明”だった。

後藤「伊達さん～どうしてここに？」

伊達「よお、後藤ちゃん。そいつは俺が会長に頼まれた助つ人だからさ」

映司「助つ人つて、伊達さんの事だつたんですか？」

鴻上『その通りだよ火野君。そして何故彼が助つ人なのか。それは、君達に映画を作つて欲しいんだよ！』

ユウスケ「え、映画！？」

シンジ「俺達がですか！？」

映司「あ、ホントだ……」

明久「それで、何の映画を作るんですか？」

鴻上『君達AFクラスには、『仮面ライダー』の映画を作つて欲しいのだよ！』

「――仮面ライダーの映画！？」「――

鴻上『 そうだよ。 実を言えばもつタイトルは私の方で決めておいたのだよ。』

鴻上『名付けて、『仮面ライダー対FFF団 Movie大戦jealousy』だ!』

「 「 「 なにそのタイトル!?」 「

翔太郎「jealousy 確か、嫉妬だったか?」

鴻上『後の事は、監督である伊達君の指示に従つて、君達の思い出に残る最高の映画を作ってくれ。私からは以上だ。伊達君頼んだよ。』

『 伊達「ああ、任せとけ会長!」

鴻上は通信の電源を切つた。

美波「す、凄い人なのね。鴻上ファウンデーションの会長つて……」

瑞希「火野君と後藤君はお知り合いなのですか?」

映司「うん、まあ、ちょっとね……」

後藤「相変わらず色んな意味で凄い人だよ…全く」

伊達「よお~し、それじゃあ、タイトルはさつき会長が決めてくれた通り『仮面ライダー対FFF団 Movie大戦jealousy』で行くからな!」

明久「結局それで行くんだ…」

伊達「まずは、皆に脚本を分けるぞ。貰つたらストーリーの所を開

いてくれ」

ユウスケ「ストーリーか。え~となになに?」

仮面ライダー対FFF団 Movie大戦jealousy ストーリー

地球は春真つ盛りの平和な日常。だが、その平和な日常をぶち壊すかのように現れた悪の組織『FFF団』が、次々と人間（彼女持ちの男性のみ）を狙っては即刻死刑。遺言を残す時間さえ与えないかのごとく残酷非道な行為を繰り返し、人類を恐怖のどん底に突き落とした。そんなFFF団の前に立ち向かつた勇気ある仮面の戦士『仮面ライダー』がFFF団に世界平和と人間の幸せのために戦いを挑んだ！今ここに、嫉妬の憎悪に呑まれた哀しき組織『FFF団』と、いくつもの悪の魔の手から人類を救ってきた『仮面ライダー』の戦いの火蓋が切つて落とされた！

伊達「どうだ皆？ストーリーを読んだ感想は？」

「「「意外とまともなストーリーだった」」

伊達「だろ？俺も最初タイトル聞いた時不安だつたけど、ストーリーを読んだら案外まともだつたのに驚いたぜ」

伊達「さて、ストーリーが分かった所で次は役決めだ。次のページには、誰が何の役やるかは書いてあるからしつかり呼んでくれよ」

生徒達は一斉に次のページを開き、キャスト紹介の所を見た。

キャスト

仮面ライダー オーズ / 吉井明久

仮面ライダー W / 左翔太郎・フィリップ

仮面ライダー デイケイド / 門矢士

仮面ライダー キバ / 土屋康太

仮面ライダー 電王 / 姫路瑞希

仮面ライダー カブト / 霧島翔子

仮面ライダー 韶鬼 / 久保利光

仮面ライダー ブレイド / 島田美波

仮面ライダー ファイズ / 木下秀吉

仮面ライダー 龍騎 / 坂本雄一

仮面ライダー アギト / 木下優子

仮面ライダー クウガ / 工藤愛子

仮面ライダー NEW電王 / 野上幸太郎

仮面ライダー ディエンド / 海東大樹

仮面ライダー アクセル / 照井竜

仮面ライダー バース / 後藤慎太郎

ゲスト

仮面ライダーフォーゼ / 如月弦太朗

仮面ライダー1号 / 本郷猛 芦川ショウイチ

仮面ライダー2号 / 一文字隼人 天堂ソウジ

仮面ライダーV3 / 風見志郎 小野寺ユウスケ

ライダーマン / 結城丈二 尾上タクミ

仮面ライダーX / 神敬介 劍立カズマ

仮面ライダーアマゾン / アマゾン アスマ

仮面ライダーストロンガー / 城茂 辰巳シンジ

スカイライダー / 筑波洋 ワタル

仮面ライダースーパー1 / 沖一也 火野映司

モモタロス

ウラタロス

キンタロス

リュウタロス

ジーク

ティディ

光夏海

鳴海亜樹子

アンク

泉比奈

歌星賢吾

城島ユウキ

F F F 団

F F F 団首領

F F F 団幹部

ナギナタカラス／須川亮

グレネードバッファー／近藤吉宗

ガトリングコブラ／田中明

チャクラムトカゲ／柴崎功

バーナーシャーク／武藤啓太

F F F 団員・その他

A F クラス・B・C・D・E クラスの協力してくれた生徒一同

伊達「キャストを見た感想は？」

「……ソシ「ミミ所があますぎる」「

伊達「あ、因みにステッパーとか雇わないから、アクションシ

ーンで怪我したつとか死なないよつとするんだが」

明久「ちよつと待つて、怪我はともかく死なないってなにー?」
秀吉「下手をすると、死んでしまうよつな危険なシーンがあるといふ事じやな」

ユウスケ「危険なシーン……濡れ場があるつてこと

「 「 「ねえよー!」 」 」

伊達「よーし、さつと決まれば早速今日から始めるだー!」

映司「えつーもうですかー!?」

伊達「当たり前だろ。わ、既。撮影口ヶ地にしゅっぱーーつー!」

「 「 「えええええええー!」 」 」

いひして、AFクラスの映画の撮影が始まつた……

第20話 早過ぎる文化祭 開幕!清涼祭!危険な撮影編
に、続く……

第19話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 準備編（後書き）

とりあえずソシ「ミ」所まとめ

平成ライダー ディケイド・W・サブライダー四人以外バカテスの
キヤラクター
フォーゼ&弦太朗 助つ人ゲスト扱い
昭和ライダー フォーゼと同じ
リイマジ+（映司） 昭和ライダー役にされた。しかも、第1話
以来のショウイチさんとソウジさん。

FFF団

首領・ナギナタカラス モデルは、『初代仮面ライダー』に登場し
た『ギルガラス』 ギルガラスは実際にナギナタを使って戦います。
幹部
グレネードバッファロー『V3』（劇場版）に登場した『タイホ
ウバッファロー』がモデル
ガトリングコブラ『V3』に登場した『マシンガンスネーク』が
モデル
チャクラムトカゲ『V3』に登場した『ノコギリトカゲ』がモデル
バーナーシャーク（恐らく）『V3』に登場した『イカファイヤ
ー』と『初代仮面ライダー』に登場した『ギリザメス』がモデル

結論

バーナーシャークのイカファイヤーの部分は、ファイヤーバーナー
だけ。

いざれば、ちゃんとした作品で投稿するつもりです。短編になるか

連載がどうなるかは今のところ未定です。

第20話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 危険な撮影編

（撮影ロケ地・どつかの採石場）

ドカーン！

ボカーン！

ドーン！

伊達「カットカットカット！ そ、このポイント火薬の量が少ないぞ！ しつかり調節しといて！」

「すいませーん！」

バース「うおおおお！」

ダン！ダン！ダン！

伊達「カットカット！ 後藤ちゃん、バスターの出力が足りてないんじゃないの？ もうちょっと上げて！ 70%ぐらいでいいから！」

後藤「はいっ！」

スーパー1「トオツ！ スーパーライダー、げつめーんキイーーック
！」

バキイツ！

カマキリ男「ぐわああああ！」

ド「オオオン！」

伊達「カット！いいねえ、火野。スーパー1様になつてゐるよー。」

スーパー1「はい、ありがとうございます！」

と、こんな感じで撮影は進んでいた。だが、一方では…。

ユウスケ「違う違う！青のクウガはドラゴンロッドをもつと素早く扱わなきや！」

クウガD「ええ！これ結構難しいよ！」

ショウイチ「アギトのパンチはもつと力強くだ。ほら、1、2、1、
2」

アギト「うう…これ結構力いるなあ…」

シンジ「ドラグセイバーは片手でもつと滑らかに振るんだ。… そお、そんなん感じ」

雄二「片手で滑らかつてのがポイントだな…」

タクミ「次、フォンブランスターで撃破したら、ファイズエッジで斬りつけてそれが終わつたら、岩の上にいる敵をジャンプして回し蹴りで落とす！」

秀吉「な、なかなか体を使うのう…」

カズマ「ブレイラウザーは意外と重いからね。まずは、素振りからだね」

美波「こつこつひいて夢のある設定で『凄い金属だけど軽くできてる』なんて設定があるかと思つたのに…」

アスム「そうですそんな感じです。久保さん上手ですね。」

久保「でも、基本僕は運動をしないからなあ…きちんと体力をつけないと」

ソウジ「カブトのライダーフォームはパンチよりキックをメインに戦うんだ。… そうそう、そんな感じでいい」

戦うんだ。……そういう、そんな感じでいい」
翔子「……けど、意外ときつい

モモタロス「いいかあ、剣つてのはなあとにかく相手を倒すつもりで大胆に振るんだよ。試しに、その力メを倒してみな。」

瑞希「は、はい…やつてみます!」

ウラタロス、ちよつと待つて瑞希ちゃん、ポンチ[せん]せる必要ないん

キンタロス「（ - ）NNN」

リュウタロス

ジーク「全く相変わらず騒がしいぞ下部たちよ」

卷之三

テテイーとりあえず彼等を止めるべきだと思ひタル「キジサアフロジ」二本を切かす。レドリ

「外川、キハはアグロハ、トは体を動かすんですか
神経いい上に体柔らかいんですね」

康太「……この位できて当然」

とまあ、こんな感じで彼等彼女等は、指導を受けていた。因みに明久は映司とアンクから一発合格を貰つたので実質今は、シーンの撮影中であつた。

伊達「それじゃあ、明久。変身いつてみようか! よ~い、スタート!

明久「僕はお前を許さない…自分の嫉妬心を物理的な痛みに代えて人の自由と幸せを奪つていく行為を…絶対に、許すわけにはいかないんだ！」変身！』

『タカーラーバッタ！タ・ト・バ！タトバ、タ・ト・バ！』

伊達「カット！いいねえ、なかなかいいぞ。」

明久「ありがとうございます！」

伊達「よお～し、一旦休憩に入るぞ。」

愛子「ふう、結構疲れるなあ」

優子「スースィアクターもスタンスマンも雇わない自分たちで全部やるもの。そりゃ辛いわよ」

翔子「……でもそのぶん、きっといい映画になる」

雄二「そうだな。こんな絶対忘れられないぜ」

明久「そうだねえ…って、あれ？」

瑞希「明久君、どうかしたんですか？」

明久「ねえ…伊達先生と話してる人、ひょっとして教頭先生かな？」

秀吉「本当じや。下見にでも来たのかのう？」

康太「……怪しい」

美波「そうよねえ。学園長が来るのは分かるけど、教頭先生って変じゃない？」

雄二「……」

翔子「……雄二？」

雄二「何か裏がありそうだな。皆、撮影中は氣をつけろよ」

明久「う、うん…」

そして、撮影再開

伊達「よお～し、じゃあ、▽3がバイクで地雷源を突破していくシ
ーン行くぞ。スタート！」

ドーン！

ドガーン！

ボカーン！

ドーン！

▽3「（あれ、おかしいな。爆薬の量多すぎないか？）」

そんなことを考えながら走る矢先、遂に一番爆薬を使うポイントに
来たコウスケ。

だが…、

雄二「！ 避けるコウスケーーっ！」

▽3「…」

ドグアアアアン！

伊達「！ カット！ ユウスケ、平氣か！？」

▽3 「だ、大丈夫です…」

伊達「オイ！ あそこに爆薬をセットしたのは山中と種口だな。ちゃんと規定の量を使ったのか！」

「は、はいもちろん！」

「間違えるはずがありません！ お願いです、信じてください…」

伊達「うーん… 誰かが細工しやがったか？」

明久「えつ！？ だとしたら誰が！？」

雄二「………… セツキの教頭があやしいな…。」

康太「……（「クリ」）」

後藤「伊達さん、セツキ教頭先生などに話をしてたんですか？」

伊達「…… 映画を作るのを止めろ… って言われたんだよ」

「 「 「ええっ！…？」」

教頭がなぜ…！？

次回、第21話 早過ぎる文化祭 開幕！ 清涼祭！ そんな脅迫に
怯むと思っているのか！ 編
に、続く…

第21話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ そんな脅迫に辟むと想つてこの

雄二「やつぱり教頭か…」

明久「でも、何でなんだろう？僕達教頭先生に恨まれるような事しつけ？」

ユウスケ「うーん。思い当たる節がないな。」

ワタル「皆さん。セットした爆薬の事なんですが…」

雄二「おひ。で、どうだつた？」

ワタル「やつぱり悪い予感が当たりました。他の設置場所の爆薬の量も規定よりも多くなっていました。」

雄二「やはりな…」

後藤「伊達さん。撮影は続行するんですか？」

伊達「……いや、向こうが何仕出かすかわからぬえからな。今日はもつと付けて終わりにする。皆、お疲れ様。」

「……お疲れ様です」

撮影を終了してAFクラスの生徒達は、下校する。

デツデツ

明久「それにして、何なんだろうね…」

秀吉「教頭の事かのう？」デツデツ

瑞希「私達、何も悪い事はしていない筈ですが…」デツデツ

愛子「一体何なんだろうねえ。」デツデツ

優子「……悪い事ではないと思うけど、試合戦争で変身して戦つた事かな？」デツデツ

翔子「……それよりも、クラスの合併の方がありえそう」デツデツ

久保「いや……それに不満を持つのは教頭先生ではなく、前にも学園長が話した他のクラスの人達で教頭先生本人には何も恨まれるようなことではないはずだ。」 デッデツ

デッデツ

デヽダン、ダン、ダン

デヽダン、ダン、ダン

雄二「…………ちょっと待て」

明久「?どうかしたの雄二?」

雄二「さっきから流れてるこのBGMはなんだ……」

久保「ああ、これは確か『帰ってきたウルトラマン』で使われたBGMだね」

雄二「なんでそんなのが流れている!?」

康太「……作者曰わく、雰囲気作り」

優子「どうせなら仮面ライダーのやううつよ……」

ワンドバダワンダバダワンダバダバダ

「「「それも『帰ってきたウルトラマン』……」「」」

明久「しかも、雰囲気作りできてないし……」

「伊達先生。これだけの金額を用意すると言つてているのにまだ映画

を作ろうとするのかね？」

伊達「……悪いけどね、教頭。あなたは生徒の思い出を金で釣るつ
なんて思っているのかい？今日の午後もなんか細工したらしきけど、
あんた…思い出を壊すだけじゃ飽きたらず、生徒の命まで持つて行
こうとしたのか？」

「なに…生徒の命まで持つて行こうとはせんよ。むしろAFクラス
には優秀な人材が多過ぎる。あれが、私の物になるのならわざわざ
殺すような真似はしないよ」

伊達「笑わせないで欲しいな。どうやってあんたがアイツらを自分
の物にしようつてんだい？」

「それは…こうするのさ」

すると教頭は、ポケットからUSBメモリのよつたものをだした。

伊達「おい、そいつはまさか…」

「ふつふつ。その通りだよ」

伊達「パソコンのUSBメモリか！？そいつでどうやってアイツら
を自分の物にしようつてんだ！」

ズダアアアン

教頭は派手にずつつけた

「USBメモリじゃない、ガイアメモリーだーとにかくコレを使つ
て、学園長を失脚させ、学園を私の物にするのが、私の野望だ！」

「君も命びろいがしたければ、学園長と鴻上ファウンデーションとの
関係を絶ち、映画の制作を中止するのだな。」

伊達「悪いけど、そいつはお断りだ。」

「なに?」

伊達「俺が、そんな脅迫に怯むと思つて居るのかい、教頭。」

「くそう、格なる上は貴様を殺してやる!」

『ウエザー』

「むんつ!」

教頭は、ガイアメモリーを首にさして、『ウエザードーパント』になる。

「ふつふつふ、この姿と力を見たからには、命はないぞ。ふつふつ
ふつふつふつふ」

伊達「あ、そ。でも、こつちにだつて戦う力はあるんだぜ。」

伊達はそう言つと、腰にバースドライバーを巻き、セルメダルを入れて

伊達「変身」

キリキリ、カポン。

ダイヤルのような物を回すと、パワードースツのよつな物に包まれ、『仮面ライダープロトバース』に変身する。

『Reverse Reverse』を再生しながら読むと楽しいかも。

「な、なに仮面ライダーだと…」

プロトバース「仮面ライダープロトバース。それが俺の今の戦う姿
だ」

「おのれえ…！ ウェザーの力で捻り潰してくれる… むんつ！」

ウェザードーパントは火炎放射で、プロトバースを攻撃するが、プロトバースはヒラリ、と避けてウェザードーパントに接近して、パンチのラッシュを浴びせる。

プロトバース「はあっ！ てりやつ！ おおおりいやあっ！」

「ぐおおおおつ！」

プロトバース「あんた力の使い方が分かつてないんじやないの？ 手
応えなさすぞ。」

「ぐぬううう、おのれえ…！」

キリキリ、カポン。

『ブレストキヤノン』

キリキリ、カポン。

『セルバースト』

プロトバース「はあああ、おつやあああつ！」

「つおおおおつ！」

プロトバースは、ブレストキヤノンのセルバーストをウェザードーパントに喰らわせるが、ウェザードーパントはまだ生きていた。

「くそつー。これでは力を手に入れた意味がないー。ここは撤退だ！」

ウェザードーパントは雲に包まれて、その場から逃亡した。

プロトバース「あつー！おい、待ちやがれ！」

しかし、雲が消えたと同時に、ウェザードーパントの姿はなかった。伊達はそれを確認すると変身を解除した。

伊達「ちいっ、逃げられたか…。」

来週は、清涼祭当口。果たして映画は完成するのかー？

次回、第22話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 当口編その1
に、続く……

第22話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 当口編その1

清涼祭初日の朝。AFクラスの教室は映画館そのものに姿を変えていた。教室にあつた壁一面の大型ディスプレイはスクリーンのように改造されていた。

士「あとは、鑑賞中の飲食物を作るだけだな」
ユウスケ「パンフレットの用意は？」

フィリップ「できている。これだけの数なら今日一日分は持つ。」

幸太郎「入場特典は？」

タクミ「清涼祭全日分余裕で持ちます！」

シンジ「……（チラッ）」 明久の方を見る

明久「……。」「」

照井「あれは暫く立ち直れそうにないな

弦太朗「よつしー！」それで教室はどうからどう見ても映画館そのものだ！」

ユウキ「うわあ……凄い」

賢吾「驚いたな。まさかこじまでリアルにできるとは……」

士「カズマ、飲食物の方はどうだ？」

カズマ「皆頑張ってるよ。それに、一人手伝いが来たし厨房の男子達の士気も上がって相当早いペースだよ。もうそろそろできるところだと思つけど……」

士「そうか…カズマ、一つだけ聞かせてくれ」

カズマ「なに？」

士「そのお手伝いは誰だ？」

カズマ「さあ？俺は聞いてないけど？」

ワタル「それにしても、急に厨房が静かになりましたね。」

アスム「ええ、さっきまであんなに騒いでたのに…」

士「……嫌な予感がするな。確か厨房班のリーダーは海東だつたか？おーい、海東ー、終わったのかー？」

すると突然、厨房から一人の女子が出てきた。

瑞希「『めんなさい』！試食を頼んだら厨房の皆が倒れちゃいました！」

カズマ「えっ…！？もしかして、お手伝いって瑞希ちゃんの事…？」

瑞希「はい、そうですけど…」

カズマ「やつぱりいい！？」

士「どうしたカズマ」

カズマ「士、厨房を見てきてもいい？」

士「？ 別に構わんが？」

カズマは厨房に行くと、『予想通り』と、言わんばかりの表情を顔に浮かべて戻ってきた。

カズマ「やつぱりしだった…」

アスム「カズマさん！それともしかして…！」

カズマ「厨房の皆が、（瑞希ちゃんの）料理食べて泡吹いてた…」

士「……姫路。ポップコーンを作るのに何を入れたんだ」

ユウスケ「やめとけ士。聞くと食べなくなるぞ」

海東「全く、死ぬかと思ったよ…」

アスム「師匠、『ご無事でしたか…』」

ユウスケ「よく生きていられたな」

海東「姫路君が来て、厨房の男子の士気が上がりつて早く終わったのに、最後の試食で皆倒れるとは思わなかつたよ…」

士「念のため他のも試食しておくれ。カズマ試食を」

カズマ「やだよ。チーフが試食すればいいじゃないか」

士「チーフ命令が聞けないのか！」

カズマ「俺は社長だよ！？一番偉いんだよ！？」

シンジ「カズマ子供みたいだよ」

士「……仕方ない。そこまで言つなら…」士は、ライドブッカーから一枚のカードを出す。

士「ここに、ディケイドとブレイドのカードがある。もし、俺がディケイドのカードを引いたら俺が試食する。だが、ブレイドのカードを引いたらお前が試食するんだぞ。それでいいな？」

カズマ「ああ、分かつたよ。それでいこう」

ユウスケ「カズマ。その勝負なんか間違つてる」

海東「ブレイド君キミ勝てないよ」

カズマ「大丈夫だよ。いくらチーフでもシャツフルをカソニングするなんていうズルはしないよ」ユウスケ&海東「「そこじゃないよ！？」

カズマは士が見えないようにカードをシャツフルする。

カズマ「よし、これなら絶対に分からぬいぞ。チーフが試食するのは決定だな」

士「ふん、言つてろ」

カズマ「じゃあ、どっちがどっちが当ててみる！」

シユツ

ブレイドのカードを引く音

士「決まりだな。カズマ、試食」

カズマ「くそーーっ！よく見たらカードの裏に紋章があるからまる分かりじゃないか！」

分かりじゃないか！」

ユウスケ&シンジ&アスマ&ワタル&海東「「「「「氣付くの遅つ
ー」」」」」

士「ルールはルールだ。さつさと試食しない」
カズマ「くそつ、分かつたよ…」

パクッ、
モグモグモグ

カズマ「なんだ、そこまで不味くはないよ。」

バタンツ

チ
ー
ン

「カズマ——つ……」

明久「えつ、飲食物は出さないの？」

士「ああ。元々食いもんや飲み物には屋台があるしな。それ食べばいいだろ」

コウスケ「おまけに、映画館の食べ物でお腹いっぱいになつて、昼食食べれなかつたつてなつたら悪いしね…」

雄一「楽しみにしてたんだけどな」

秀吉「残念じやのう」

康太「……（「クリ」）

瑞希「私も、せっかく作ったのに、残念です……」

明久「

雄一「

秀吉「

康太「

ユウスケ「

シンジ「

タクミ「

アスム「

幸太郎「

ワタル「

士「……」

海東「

翔太郎「

フィリップ「

照井「

映司「

アンク「

弦太朗「

後藤「

賢吾「

ユウキ「

カズマ「

雄二「…………なあ士、カズマは一体
士「飲食物の提供は禁止だ」
」

次回、第23話 開幕！清涼祭！ 当口編その2
に、続く……

第22話 早過ぎる文化祭 開幕！清涼祭！ 当口編その1（後書き）

なかなか思い通りに書けない今日この頃。果たして、上手く話が繋がる事が出来るだろうか……。

第23話 開幕！清涼祭！ 当日編その2

明久「いや、それにしても凄く人気あるね。僕達の映画」

雄二「あそこまでクオリティが高くやれたんだ。年代関係なしで誰でも楽しめるからな」

シンジ「まあ、中には入場特典目当てに来る人もいるしね……（ボソツ）」

明久「シンジ君。僕今スッゴく嬉しくないよ、うな事聞いたんだけど」

シンジ「気のせいじゃない？」

賢吾「そういうえば坂本。召喚大会のメンバーはどうなったんだ？」

ユウキ「確かにクラスで2チームまでならOKなんだよね？」

弦太朗「てことは、俺達AFクラスなら4チームまでOKって、ことだな」

ワタル「いくらなんでもそれは……」

雄二「弦太朗の言つ通りだ。俺達AFクラスなら4チームまでOKだ」

ワタル「いいんですか！？」

カズマ「まあ、うちのクラスって、AクラスとFクラスが合併したクラスだからね」

雄二「なんだカズマ。もう大丈夫なのか？」

カズマ「うん。その後土絞めたからもう大丈夫だよ」

幸太郎「それだと士が大丈夫じゃないと思う」

ユウスケ「まあ、士の方にも問題はあったしな……」

士「…… 泡吹いてる

明久「ねえ、あれ助けた方が良くない……？」

ちなみに、メンバーは

男子

- ・明久&雄一ペア
- ・幸太郎&タクミペア

女子

- ・瑞希&美波ペア
- ・翔子&優子ペア

といつ、結果になった。

ユウキ「ねえ、弦ちゃん」

弦太朗「ん? どうかしたのかユウキ?」

ユウキ「弦ちゃんは… 瑞希ちゃんのあの事聞いてる…?」

弦太朗「知ってるぜ。転校の事だろ。賢吾から聞いた。」

ユウキ「その事なんだけど… 実は、その話なくなつたらしいの…」

弦太朗「そいつは本当か…?」

ユウキ「うん。弦ちゃんと士君が設備を替えてくれたおかげで昨日瑞希ちゃんの両親が転校の話をなしにしてくれたらしいよ…」

弦太朗「そうか。そいつはよかつた…」

ユウキ「それと明久君達は、召喚大会に行くからこには任せたって、

雄一君が言つてた」

弦太朗「よし、そうと決まればお仕事再開だ!」

ユウキ「うん!」

賢吾「(ちつ、如月の奴め… 羨ま… 羨ましいぞ…)

次回、第24話 開幕! 清涼祭! 召喚大会一回戦

に、
続く
。.

第23話 開幕！清涼祭！ 当日編その2（後書き）

久々の投稿でこの短さ。おまけにサブタイ変更。次回は、召喚大会一回戦ですが、書くのは男子のペアのみの予定です。感想お待ちしております。

第24話 開幕！清涼祭！ 召喚大会一回戦

召喚大会会場

「それでは、召喚大会一回戦を始めたいと思います」

明久「雄二、一回戦はEクラス何だよね？」

雄二「ああ。油断しなければ楽な相手だしな。」

モニターから鉄人の声が響く

西村「青」「一」「A」「F」「クラス」「坂本吉井ペア」

西村「赤」「一」「A」「B」「クラス」「本多菊入ペア」

雄二「何だと！？」

明久「どうして！？相手はEクラスのはずじゃあ…」

雄二「まあ、鉄人の事だからちゃんとやり直すだろ…」

西村「どうした！」

「き、機材のトラブルかと…」

西村「後がつつかえる構わぬ続行しろ…」

雄一＆明久「鬼があんたは…」

律子「しあわせがないわね…真由美。ひとつと終わらせよ」

真由美「そうね。相手はどうせAFクラスの贅沢バカコンビだしね」

西村「一回戦、対戦科目数学。始め！」

律子＆真由美「試験召喚！（サモン！）」

数学

Bクラス

本多律子 175点

&

菊入真由美 165点

明久「やれやれ…でか口叩いた割には大した事ないね」

雄一「全くだ。俺達AFクラスもなめられたもんだ」

律子「な、なんですって！」

真由美「アンタ達がアタシ達にかなう点数がとれるはず…」

雄一＆明久「試験召喚！（サモン！）」

数学

AFクラス

坂本雄二 321点

&

吉井明久 247点

律子「嘘! なんでアンタ達がこんな...!」

雄二「単純に贅沢していると思つてているのか?」

明久「確かに贅沢させて貰つたよ... 学習環境をね!」

数学

A Fクラス

坂本雄二 321点

&

吉井明久 247点

VS

Bクラス

本多律子 0点

&

菊入真由美 0点

西村「勝者青コーナー 坂本吉井ペア!」

真由美「そ、そんな...」

律子「アタシ達がこんなバカコンビに...!」

明久「バカコンビ? 失礼だな。負けたクセに」

雄二「お前らなんざ、努力すりやあいくらでも越えられるんだぜ」

律子＆真由美「く、悔しい…！」

タクミ「お疲れさん、二人とも」

タクミは一人にオロナミンCを渡す

明久「ありがと。タクミ君」

雄二「サンキューな。タクミ」

幸太郎「二人共。気持ちは分かるけど、あんまり敵を作るなよ。ただでさえあの根本が…」

雄二「分かっている。俺達だつて無駄に面倒な事はしたくはない」

明久「Aクラスの設備を手に入れた今、試合戦争をする目的もないしね」

タクミ「そうだね…おっと、そろそろ僕達かな。行きましょう、幸太郎さん」

幸太郎「そうだな。じゃ、行ってくる」

明久「うん。頑張つてね」

タクミと幸太郎は会場に駆け足で行く

西村「青コーナー、AFクラス 尾上野上ペア」
タクミ「西村先生、言いにくくないですか?」

西村「正直言つて言ひにくい」

幸太郎「やつぱね…」

西村「赤コーナー、Cクラス 山中高梨ペア」

幸太郎「相手はCクラスか…」

タクミ「問題ありませんね。いきましょう!」

西村「一回戦、対戦科目数学。始め!」

タクミ&幸太郎「「試験召喚! (サモン!)」」

山中&高梨「「試験召喚! (サモン!)」」

数学

AFクラス

尾上タクミ 418点

&

野上幸太郎 406点

VS

Cクラス

山中加奈子 132点

&

高梨美夏 121点

山中「ちよつ、こんなの勝てるわけ……！」

タクミ「さよなら」

幸太郎「あばよ」

数学

A Fクラス

尾上タクミ 418点

&

野上幸太郎

406点

VS

Cクラス

山中加奈子 0点

&

高梨美夏 0点

西村「勝者青コーナー 尾上野上ペア！」

幸太郎「ま、相手が悪かつたな」

タクミ「え……うん、うん……分かりました。すぐに戻ります」

タクミはファイズフォンで電話していた

幸太郎「…どうかしたのか？」

タクミ「今、僕らのクラスが大変な事になつてるって、ユウスケさんから電話が…」

幸太郎「何だつて！すぐに戻るぞ！」

タクミ「はい！」

果たして、AFクラスになにが……！？

次回、第25話 開幕！清涼祭！ 衝撃の来客者
に、続く……

第24話 開幕！清涼祭！ 召喚大会一回戦（後書き）

次回、とんでもないキャラクターがたくさん出てきます。
Bクラスの真由美さんの名前は、菊入でよかったですでしょうか？
間違つてたらすいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2073x/>

仮面ライダーディケイド～バカとテストと召喚獣の世界～（W、オーズ、フ

2011年10月30日14時22分発行